

フィールドレポーター

掲 示 板

2004 年度第 1 号通巻第 30 号(4 月)



宮本 真二(滋賀県立琵琶湖博物館)

この掲示板がお手元に届く頃は、桜も散り始めているでしょう(まだ散っていなかったらごめんなさい)。

今年度のスタートです。フィールドレポーターの活動も心機一転した活動を行ってゆきたいと思っています。

その先駆けとして、5月に東京で行われますボランティアメッセ 2004 に琵琶湖博物館フィールドレポーターも遠征します。準備も着々と進んでいますが、ぜひみなさまもご参加ください。

大学院生活は東京ですごしましたので、会場の未来科学館近辺は、ある意味琵琶湖とは違った「水辺」空間が展開することを知っています。それなりに違った刺激のある場所です。そこで、フィールドレポーターさんの技を発揮するのも、よいイベントだとおもっています。

遊びというのはお金をかけずとも、身近な素材を利用することで、楽しさを演出できることを伝えることができれば、とおもっています。

今年度もよろしくおねがいいたします。

フィールドレポーター4月/5月/6月の予定をお知らせします。

- | | | | |
|----------|------|------------------------------|---------|
| 4月3日(土) | 定例会: | 於: 琵琶湖博物館 | 10:00 ~ |
| | | 交流室交流会の準備,FR 掲示板発行など | |
| 4月17日(土) | 定例会: | 於: 琵琶湖博物館 | 13:30 ~ |
| | | 交流室交流会の準備作業など | |
| 4月18日(日) | 交流会: | 於: 琵琶湖博物館生活実験工房 | 13:30 ~ |
| 5月1日(土) | 定例会: | 於: 琵琶湖博物館交流室 | 13:30 ~ |
| | | 5月4日(火)~5日(水) 於: 日本未来科学館(東京) | |
| | | ボランティアメッセ 2004 に参加 | |
| 6月5日(土) | 定例会: | 於: 琵琶湖博物館交流室 | 13:30 ~ |
| 6月19日(土) | 定例会: | 於: 琵琶湖博物館交流室 | 13:30 ~ |
- 稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

担当者変更のご連絡

「旧人」からのご挨拶

宮本 真二

この度の内部担当者変更で、フィールドレポーターの担当からはずれることとなりました。一年間という短い間でしたが、不慣れな運営にご協力いただき、たいへん感謝しております。お世話いただき、ありがとうございました。

何事も合理性が求められる最近で、時には疲れることも多いのですが、みなさんの一生懸命な姿勢には、驚きの連続で、癒しの場でもありました。

といいましても、琵琶湖博物館から居なくなるわけではありませんので、今後とも、よろしくおねがいいたします。過去に交流センターは観察会などの担当をしていましたが、今度は交流センターを離れ、情報センターという部署で、博物館の事業系の仕事をを行います。研究ではこれまでどおり、自然と人間との関係史の仕事を進めてゆく予定です。

今後とも、琵琶湖博物館の活動にご理解、ご協力のほどよろしくおねがいいたします。

「新人」のご挨拶

楠岡 泰

2004年度のフィールドレポーター担当をさせていただくことになりました楠岡 泰と申します。フィールドレポーター担当ははじめてですが、田んぼの生き物調査の担当をしまして、2年前まで交流センターにおりましたので顔見知りの方も多くいらっしゃると思います。

専門は微生物生態学で琵琶湖のプランクトンなどを追っかけていますが、生き物大好き人間で、昆虫や植物、鳥にも関心をもっております。皆様と一緒にフィールドに出て新しい発見をするのを楽しみにしております。副担当の牧野厚史ともどもよろしくお願いいたします。

「ビワマスとサツキマス(アマゴ)の関係」を研究

桑原 雅之さん

草津市 古谷 善彦



桑原さんは'02年度まで丸3年フィールドレポーターの担当としてお世話いただいた事で、フィールドレポーターのみなさんにもお馴染みですが、今回は「学芸員紹介シリーズ」10回目という節目にご登場いただきました。

研究テーマの「琵琶湖水系に生息するビワマスとサツキマス(アマゴ)の関係」について興味のあるお話をしていただきました。

Q: 館内の「研究紹介コーナー」に、「琵琶湖水系に生息するビワマスとサツキマス(アマゴ)の関係」とありますが、研究の動機を聞かせてください。

A: 話せば長くなりますが、私は長崎県佐世保市の出身で、周りを海に囲まれて育ちました。そのため、小さい頃から魚が好きでしたが、もっぱら海の魚ばかりでした。将来は、海に潜って魚の研究をしたいと考えていたようです。

愛媛大学に入ってスキューバダイビングを始め、海に潜って魚の観察ばかりやっていました。ところが、卒論に入る直前の卒業生追い出しコンパで、淡水魚の大家で恩師でもある水野先生から、「そんなに魚が好きなら面白い魚がいるよ、イワメ(淡水魚でアマゴの変種みたいなもの)という魚の研究をしてみないか」と勧められたのが、淡水魚との出会いでした。ただ、それ以後私にとっての淡水魚とは、サケ科魚類のことになってしまいました。

大分県の竹田市を流れる大野川の源流でイワメに出会い、三重大学でアマゴの調査を1年半ほどした後、琵琶湖文化館を経て現在に至っています。文化館時代、飼育するのはコイ科の魚が中心だったのですが、研究テーマとしては、それまでやってきたサケ科魚類をあつかいたいと思っていました。そんな折、琵琶湖にビワマスという固有のサケ科魚類がいることは知っていましたが、現在水産課におられる藤岡さんが研究しておられたくらいで、ほかに研究している人がおらず、しかも天然での生態についてはほとんどわかっていないということを知り、ビワマスを研究テーマにすることにしました。

その際、琵琶湖に流れ込む川の上流には、きわめて近縁な魚であるアマゴが生息していますが、これとの関係について考えたら面白いのではないかと考えたわけです。

Q: ビワマスと聞くと名前のとおり琵琶湖の固有種だと思いますが、調査、研究のエリアは滋賀県内が主になるのでしょうか。

また、ビワマスは本来琵琶湖のみに生、富、したとしても、現在琵琶湖以外で生息が確認されているところは有るのでしょうか。

A: ビワマスは、本来琵琶湖にしかいないので、調査範囲はほとんど県内です。

県外では、芦ノ湖、中禅寺湖、木崎湖に放流された記録があります。

芦ノ湖については、ちゃんとした記録が残っていないようでよくわかりませんが、現在ではサケ科魚類をはじめ多くの魚種が放流されているので、釣り堀のような状態になっているようです。

中禅寺湖には、ホンマスと呼ばれる魚があり、これがビワマスといわれています。ただ、この湖にはもともと魚はおらず、人為的にいろいろな魚を放流してきたという経緯があります。そんな中で、ビワマスのほかにサクラマスなども放流され、現在いるホンマスはどれもこのビワマスとサクラマスの交雑種のようなようです。

木崎湖にも、キザキマスと呼ばれるマスが住んでおり、これもビワマスではないかといわれています。ただ、キザキマスの抱卵数がビワマスよりも2倍近く多いことや、もともと木崎湖には日本海から上ってくるサクラマスがいたことなどから、中禅寺湖と同じように混ざってしまっているのではないかと思います。

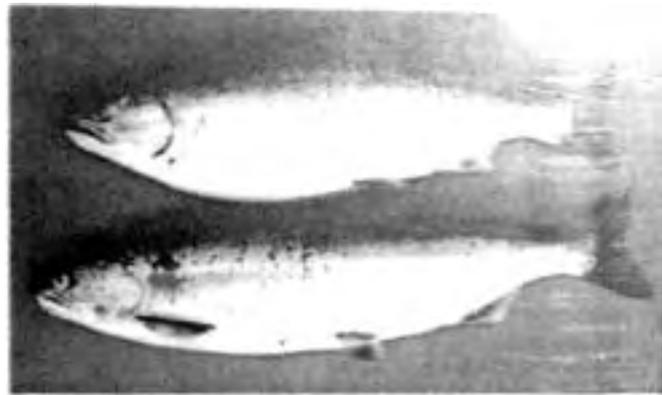
そんな関係で、純粋なビワマスは本来の生息地である琵琶湖にしか残っていないのではないかと考えています。ただ、近年琵琶湖でもサツキマスカミ獲れるようになりました。その多くは、ヒレが擦り切れていたり、再生鱗が多いなど川の上流で放流されたものが、琵琶湖に下ったと考えられるものです。

琵琶湖の漁師さんに話を聞くと、昭和40年代頃からマスの顔つきが変わったといわれます(琵琶湖に下ったアマゴは目が小さく、鼻先がとがってきつい感じなのに対し、ビワマスは目が大きく、鼻先が丸いため優しい感じがする)。

この時期は、ちょうど滋賀県でもアマゴの放流が始まった頃なので、これらの放流されたアマゴが琵琶湖に下りサツキマスになったのではないかと考えています。

Q: ビワマスとサツキマス(アマゴ)の関係を説明してください。

A: かつて、大島正溝さんという人の「ビワマスはアマゴが琵琶湖に下ってマス化したものである」(長良川にいるサツキマスもビワマスだと云われていた)とする説がずっと信じられていました。ところが、1970年代後半に、福井県鯖江市におられる加藤文男さんがビワマスとサツキマスの研究を行い、ビワマスとサツキマスにはずいぶん違う点があるということがわかり、現在では亜種の間にあるとされています。



琵琶湖で漁獲されたサツキマス(上)とビワマス(下)

現在、琵琶湖水系には川の上流にアマゴがあり琵琶湖にビワマスがいるということになっています。どちらも、産卵場

所や産卵時期、産卵生態などがよく似ていると考えられます。亜種というのは、一緒になることがあれば交配して混じってしまうというレベルの違いしかありませんから、両者が同じ水系で別物として存在しているというのはたいへん興味深いものです。

また、かつては淀川でも大量のサツキマスカミ漁獲されていたようです。現在は長良川が有名ですが、当時の漁獲量を比較すると淀川の方が桁違いに多かったようです。この中には、ビワマスも入っているのだらうと云われていますが、それを差し引いても相当な量になります。琵琶湖は河口から約60kmほどしかありません。その間には、滝などの障害物もないため、淀川を上ってきたサツキマスは、当然琵琶湖にも入ってきたらうと考えられます。ところが、文献によるとサツキマスは琵琶湖には入ってきていなかったようです。

琵琶湖の川の上流に住むアマゴ、琵琶湖にすむビワマス、それに淀川を遡上していたサツキマス、これらの関係を考えると、多分に琵琶湖の成立と関係しているのではないかと思えて、非常に面白いですね。

Q: 琵琶湖の在来種の魚がバスやギルによって激減している状況ですが、ビワマスの場合はどうなのでしょう。また、開発などによる生息乗境は変化しているのでしょうか。

A: ビワマスがバスやギルと出会うのは、琵琶湖に下るときぐらいなので、ほかの魚ほどの影響はないと思います。

漁獲量で見ると、昔多いときには年間150tくらい獲れたこともあるようです。

現在では、おおむね 20t 前後くらいで低値安定していますが、本来ならば少なくとも 30~40t くらいは漁獲がおってもおかしくないのではないかと思います。

また、河川改修や堰堤、ダムなどによって、ビワマスが本来の産卵場所まで遡上できなくなっていることや、産卵期から稚魚が浮上するまでの期間に河川工事が行われることが多く、産み付けられた卵がだめになることも多いのではないかと思います。また、産卵期に密



サツキマス稚魚（アマゴ）(上)とビワマス稚魚(下)

漁が横行し、産卵直前のビワマス親魚を獲ってしまうことも、ビワマスの資源量を減らしている大きな要因だと考えています。おそらく、ビワマスの産卵をきちんと保護してやれば 10 年ほどで、漁獲量は倍増するのではないかと思います。

Q: たいへん勉強になるお語をお聞きすることが出来ありがとうございました。

最後になりましたが、目々お忙しい中での桑原流健康法とか趣味をフィールドレポーターの皆さんに公開していただきたいと思いますが。

A: 現在は、特に健康法と云うことはしていません。趣味は、釣りとバイクで、スズキ GSX1100S KTANA という大きなバイクに乗っています。ただ、時間がとれなくて釣りにも思うように行けず、バイクももっぱら通勤に使う程度になっているのが現状です。

そんな状況で、子どもとの接触も少なく、「親はなくても子は育つ」の心境になっています。

ありがとうございました。益々のご研究の成果を祈念いたします。

魚の写真は琵琶湖博物館の「研究紹介コーナー」から借用しました。

学芸員さんからの回答

第3回 回答

黒田 耕平(琵琶湖博物館資料整理職員)

加固さんの質問「あなたのお名前何て言うの」について回答を3回に分けて掲載しています。

第1回 回答を2003年度第4号で、第2回の回答を前号第5号に掲載しましたが、今回は第3回 回答として掲載いたしました。今号で連載完結です。

(2)ツキノワグマの名称について

これだけの文献をよくお調べになったと感服いたします。

ここで一つ整理のために、ツキノワグマの名付けられた経緯を書き記してみましょ。

1758年:

かのリンネ(Linne)が以降の動物命名の規範となる『*Systema Naturae*』第10版を発行します。その中でヒグマに[*Ursus arctos*]という学名を与えました。

(元となる標本はリンネの母国スウェーデン産)

1823年:

ダーウィンとの論争でも有名なフランスの大博物学者ジョルジュ・キュビエ(Georges Cuvier)はアッサ今地方のシルヘットで採られたクマを新種と判定・ヒグマの同属別種と考え、[*Ursus thibetanus*]う名を付けて発表しました。同時代に別のキュビエさんがいるので、命名者として彼の名を学名に付記するときは“G.Cuvier”とすることもあります。

1842-1844年:

シーボルト(Siebold)が日本滞在中に採取した膨大な標本や図画を元に、オランダのライデン博物館の館長テミンク(Temminck)と脊椎動物管理者シュレーゲル(Schlegel)が『*Fauna Japonica*』の哺乳類編を刊行しました。その中で、日本において『Kuma という名、または三日月斑を持つクマを意味する *Tsukinsiva kuma* という名を与られている』クマが[*Ursus thibetanus*]であると記述されています。

余談ですが、シーボルトが標本につけたラベルの和名は出島のあった長崎のものであることが多いので、*tsukinsiva*も *tsukinowa* の誤植ではなく長崎方言だったのかも知れません。(「月ン縞」または「月ン皺」の意でしょうか?)

1857 年:

シュレーゲルは自分達が初めてヨーロッパに報告した日本の *U. thibetanus* にあらためて [*Ursus japonicus*] という名前をつけて新種として記載し直しました。その後、これは一般的な見解で亜種に格下げされてしまいますが、"japonicus" という名称を提唱したのはあくまでシュレーゲルなので、日本産亜種についての命名者は今でもシュレーゲルです。

1901 年:

東アジアの動物学に対して多大な貢献をしたイエズス会士ウード(Heude)が [*Ursus thibetanus*] には新属が適当だと判断します。彼は *Ursus* 属の代わりに *Selenarctos* 属を提唱しました。

1938 年:

アレン(Allen)は、1864 年にグレイ(Grey)がアメリカクマに対して提唱した *Euarctos* 属に、このツキノワグマもまた属すると主張しました。

現在、日本のツキノワグマの種小名として "japonicus" を採用している研究者や文献は全くとっていいほど見られません。また、*Euarctos* 属に含める説も同様です。問題はツキノワグマとヒグマの違いが属レベルで違うのか、それとも同属内の種レベルで違うのかという部分です。今泉吉典博士の同定基準をあげてみます。

手掌は全部裸出する。肩は背より低い *Selenarctos* 属

手掌は前半のみ裸出。肩は背より高い *Ursus* 属

逆にこれらの差が属を分けるほどの物ではないと考えるならば彼らは同属ということになります。これに関してはまさしく見解の差であるとしか言いようがありません。

研究者には分類を細分化したがる派とまとめたがる派がいつの時代にもいるそうです。クマ科の動物はジャイアントパンダを含めたとしても全部で 8 種しかいないのですが(この 8 種に分けることについては研究者間でもほとんど異論はありません)、最小限にまとめた場合、ジャイアントパンダと南米に住むメガネグマを除いた残りの 6 種がことごとく *Ursus* 属に含まれてしまいます。一方、最大限に細分化すると、クマ科は 7 属 8 種または 8 属 8 種(つまり全部 1 属 1 種)になります。

研究者間でも意見が分かれていますし、支配的な意見というものもないようなので、ツキノワグマの属を *Ursus* 属にするか *Selenarctos* 属にするかはある程度自由なのではないでしょうか。ただし他のクマとの対比を考えると、例えば 1 属 6 種の *Ursus* 属から *Ursus thibetanus* だけを *Selenarctos* 属として独立させ、他はそのままにしておく、という様ないささか自己中心的に見える分類を何の根拠もなく行ってはいけません(もちろん確固たる根拠があれば別です)。

ツキノワグマという和名にニホンという接頭辞をつける場合は、特に日本産亜種 (*Ursus thibetanus japonicus* または *Selenarctos thibetanus japonicus*) について言及している事を明らかにしたい場合合だと思われます。また、前述のようにクマ科は 8 種しかいないのでそれぞれに対する和名はほぼ確定しています(ヒグマ/アメリカクマ/ホッキョクグマ/ツキノワグマ/マレーグ

マ/ナマケグマ/メガネグマ/ジャイアントパンダ)。よって、外国産の月の輪を持つクロクマであってもマレーグマをマレーツキノワグマと言ったり、アメリカクロクマをアメリカツキノワグマとは言わないのが通例です。

「月の輪熊」という名前は月の輪を持つことでつけられるのではなく、あくまでツキノワグマという種 (*U. thibetanus* または *S. thibetanus*) に対して与えられる物とご解釈下さい。また、ツキノワグマという和名を日本産亜種に限定して使用し、*S.* (または *U.*) *thibetanus* にはヒマラヤグマという和名を用いることもあるようですが、あまり一般的ではないようです。

ここでニホンツキノワグマ以外のツキノワグマ亜種をどう呼ぶかについては、よく判らないとしか申し上げられませんが、*S. thibetanus thibetanus* をおそらくヒマラヤツキノワグマ、*S. thibetanus ussuricusu* をウスリーツキノワグマと呼ぶとは言えても、他の亜種に対する和名が確定してるとは言えないのです。きっと地名を頭につけるのがごく普通のやり方だろうと思うのですが、和名にはシュレーゲルアオガエルのように学名の種小名や亜種名をカタカナになおして接頭辞にする事もあるので言明は避けさせていただきます。

(3)和名について

学名は前述のように皆が守るべきルールや規範が明文化されています。しかし残念ながら和名についてはそのような物はありません。違う生物に同じ和名が与えられている例も多々あります。ミズクは鳥類と昆虫にいますし、ミズムシは甲殻類と昆虫に、シャコは甲殻類と鳥類と二枚貝に名付けられています。植物まで範囲を広げれば、ホトギスやオヒョウ、はてはミヤマクワガタという名の草や木があります。

一応学術的分野では先に発表された物を尊重する、という暗黙の了解のような物がありますが、学名のように先取権が絶対的なものではありません。別の研究者が後から「こちらの方がより適切だ」と考えた名前を公表し広めることは自由です。例えば爬虫両生類の研究者で、和名について「地名を和名の冠につけるべきではない。インドネシアニシキヘビと名付けたヘビにインド亜種がいることがわかったとき。インドインドネシアニシキヘビと呼ぶのはナンセンスだ」という主張をしておられた方がいたと記憶しております。他にも、アホドリはあんなに美しい鳥なのに名前で損をしているから別名である「トウクロウ」を標準和名にしよう、と言う方もいらっしゃいました。

また、和名というのはその時代時代で最も一般的だと思われる名前がつけられる物だと思います。「アホートル」が「ウーパールーパー」に取って代わられることはさすがにもう無いと思いますが、「スリカータ」は「ミーアキャット」に少しずつ浸食されてきてますし、「ハダカカメガイ」は「クリオネ」にかなり押され気味です。「ガランチョウ」「ペリカン」もそのような流れだったのではないかと推測します。

日本鳥学会が刊行している「日本鳥類目録」は 1922 年の初版から 2000 年刊の最新版第 6 版にいたるまで、毎回刊行のたびに内容を少しずつ更新・改訂しながら発刊されてきました。基本的に日本産鳥類の全てを網羅しているこの目録には和名も記入しており、日本の鳥類図鑑やガイドブックの基本的な参考文献となっているようです。幸いにこの目録の版のいくつかを調べることができました。1932 年(昭和七年)の第二版では文句なしに「伽藍鳥科/ガランテウ」となっています。1958 年の第 4 版は戦後初の版ですが、そこでもやはり『ガランチョウ科/ガランチョウ』となっています。ただし目次の各科一覧での表記では『ガランチョウ(ペリカン)(伽藍鳥)科』とペリカンという名が並記されています。

1974 年に出版されたのがその次の版、第 5 版ですが、そこでは既に[ペリカン科/ハイロペリカン]という記述になっており、それは現在の第 6 版でも同様です。

入れ替わってしまった時代というのはおそらく 60 年代ごろなのではないでしょうか。

正直に申し上げますと、ペリカンのことをガランチョウと呼ぶという事を私は全く存じ上げませんでした。念のため周囲の 20 代 30 代の知人何人かに尋ねてみましたが、やはり誰も聞いたことがないとのことでした。

「がらんちょう」という名前は既に「和漢三才図会」など江戸時代の書物にも見られます。しかしこれらの書物では「信天縁(翁)」という鳥が同じ物とされていることがよくあります。ご存じのように中国でも日本でも信天翁と書けばアホウドリのことをさすのが普通ですが、この記述のためアホウドリの別名として「ガランチョウ」をあげる本もありました。これらの混同を避けるためにペリカンという和名を使い始めたのではないかとも思いましたが、これは全く憶測の域を出ないものです。

一方、1930 年(昭和五年)に当時の農林省に兵庫県の一般のナチュラリストから送られた、鳥の名称についての手紙には[和名ガランテフ方言ペリカン]ともありましたので、ペリカンという名も 60 年代になっていきなり現れたというわけでもなさそうです。

ガランチョウに比べれば「コクハクチョウ」という言い方は少数派とはいえ、今では全然耳にしなくなったという呼称ではないようです。もちろん漢字に直したときに奇妙になるという点ではありますが、このあたりだと使う人の裁量に任されていると考えて良いと思います。

コビトゾウをマルミミゾウと言うようになったというのは、恐らく差別用語とは無関係だと思われます。そもそも「コビトゾウ」と呼ばれるゾウの実体が必ずしも現在のマルミミゾウと同じ物ではなかったのではないのでしょうか。平凡社の「動物大百科」の記述で、[体高 2m ほどのコビトゾウの記録がいくつかあり、それを別種や別亜種にする意見もあったが、現在では普通の体格の群に偶然生じた矮小個体に過ぎないと見られている]とあります。

ここで述べられているゾウは今の「マルミミゾウ」と明らかに異なるゾウですが、昔の本ではマルミミゾウとしてコビトゾウという名称を使っている物もあるようです。このような場合、つまりその名がどち

らの意味で使われているか、何をさしているかあやふやで誤解を生じる恐れがある場合は、その名前に代わる物がある限り別の名を使う傾向が強いようです。他の例では「ムジナ」などがそうでしょう。おそらくそのような経緯でマルミミゾウのほうで定着したのではないかと推測します。

むしろ「ピグミーチンパンジー」「ボノボ」が差別用語忌避の結果という方が可能性があると思います。「小さい」の意味で「ピグミー」とつけるのは最近の命名ではあまり行われなような気がします。

研究書をざっと見たかぎりでは、日本の研究者は最近までもっぱら「ピグミーチンパンジー」を使っています。70年代はすっかり「ピグミー」ばかりですし、80年代に入ってもその傾向は変わりません。90年代に入ってボノボが優勢になったようですが、括弧付きでピグミーチンパンジーといれたり、その名でも呼ばれるという事への言及をちゃんとしています。

海外の研究者ではすでに70年代に両方の名前を並列していました。H.ヴェントの1958年の著書によると、すでにその頃ヨーロッパでは動物園の飼育係などがボノボと呼んでいたそうです。

「ボノボ」の語源に関しては一般には現地名とされるようですが、由来不明とされることもあります。日本の研究者が調査したときは、現地では「ビーリャ」と呼ばれていたそうです。ひょっとしたら動物園に送られてからつけられた愛称だったのかも知れません。

ちなみにボノボの系統的な位置は、彼らが新種として認められて以来変化していません。今でも基本的なスタンスは「*Pann*属2種のうちの1種です。テレビなどではその生態がどこか人間くさいために、「最もヒトに近い類人猿」のような紹介のされ方をしますが、ボノボと普通のチンパンジーが分岐したのは両者の共通の先祖がヒトと分岐した後だと考えられています。

意外なことですが、現在判明している全ての哺乳類が和名をつけられたのは、やっと1987年になってからで、平凡社の「動物大百科」においてだそうです。逆に言えば、それまでは哺乳類の全目とおして命名した物は無かったわけです。前述しましたように、和名は学名と違って発表する必要も変更を宣言する必要もありません。ですから和名を誰が名付けたか、とか誰が変更したか、ということは非常に判りにくいことなのです。

ご覧のように今回いくつか調べてみて、それなりに努力はしたつもりなのですが、明確な解答が得られた物はありませんでした。もちろん私の力不足もありますが、この様な事情もあるということをご理解いただきたく、どうかご容赦の程お願いいたします。

それでは長々と駄文にお付き合いいただきありがとうございました。

表 題【ヨシガリにたいして】

投稿日【2月4日】お名前【大津(市)町村井谷高歩】

ヨシガリに行きました。ヨシを刈って火をつけて火が
やすと春に新しい芽が出ます。また来年も刈りた
いでまこうしてびわ湖が元気にふえていくの
がうれしいです。



表 題【ヨシガリの事】

投稿日【 】お名前【大津(市)町村井谷風湖】

ヨシガリはおもしろい。と中であつくなる。ヨシをかってメイ
ロもついていたが母さんにおこられた。もうしてない。今は
横にかかっている。春に新しいめがでてくるのが
たのしみ。



表題【琵琶湖内湖に興味をもち始めた。】

投稿日【04・02・09】お名前【大津 市町村 井谷 和美】

毎週のように、ヨシ原に行っています。
鳥丸グリーングラブ前のヨシ原に降り立った時、
これも「池」や「溝」ではなく、内湖でした。



ドウイグで行った近江、幡身命寺周辺も
干拓された内湖だったらしい。琵琶湖下橋
守山側とか、瀬田の辺りとか、今ではすっかり土地な
ところもかつては湖だったのか。ヨシ原から、
いろいろなとろを見ることができます。



ボランティアメッセ 2004「つながりあう未来のミュージアム」

参加について

FRS : 森 擴之

先にお知らせ致しました通り、来る5月4,5の両日、日本科学未来館(東京)において、表記ミュージアムボランティア・メッセが開催されます。

同様の催しは、兵庫県立人と自然の博物館(三田)での開催を機に一昨年、昨年と過去2回琵琶湖博物館はしかけならびにフィールドレポーターとして参加してまいりました。

今回の日本科学未来館でのボランティア・メッセにも、琵琶湖博物館フィールドレポーターとして参加し、琵琶湖博物館ならびに私たちフィールドレポーターの日ごろの活動を来訪者の皆様にアピールすることと致します。

参加内容につきましては、本年初めより、スタッフの皆さんと何度も相談させて頂き、大略下記の内容を予定しております。

記

I. パネル展示

1. 滋賀のたんぼぼ

2002年度第1回調査結果より

2. 琵琶湖博物館周辺で見られる蝶たち

2004年度第1回調査結果より

. 来訪者参加型イベント

1. よし笛作成

2. 蝶の親子探しゲーム

III. 参加予定者

1. 博物館学芸員2名

2. フィールドレポーター4名

* スタッフからのお願い

過去の経験から、フィールドレポーター4名ではかなりの人手不足が予測されます。連休中ではありますが、出来るだけ多くのフィールドレポーターの皆様のご参加をお願い致します。

ご参加いただける方は博物館 楠岡 泰さんまでご連絡下さい。

(: 077-568-4811 ; E mai1 : kusuoka@lbm.go.jp)

以上

フィールドレポータースタッフからの一言

年々歳々花相似たり、歳々年力人同じからず。

今年の桜の開花は例年よりやや早いという气象台予載がありましたが、まさしく三寒四温を経て3月下旬には開花宣言が出て、いよいよ満開の季節となりました。みなさんはどこかで満開の桜を愛でられたでしょうか？桜は特に満開の時期が短いように思いますが、それでも地域や種類によって、まだまだ見られるところは、たくさんあるようですね。

今年も又、新年度がやってきました。

フィールドレポーターのみなさん、新年度をいかがお迎えでしょうか。入学、入社、転勤(昇進、栄転)などの転機とともに、人生の上り坂に洋々とした希望と、なお一層の努力意識を確信された人も多いのではないかと思います。

反面、去る3月で大過なくめでたく？リタイアした人もあったりして...4月は一年の中で個人も社会も変革、改革の時でもあると言えるでしょう。



フィールドレポーター調査は、「わが家の年中行事」を実施中です。

今回担当されています津田さんは、いろいろと文献などを調べて調査項目を設定されました。「わが家」「わが地域」湖国の伝統継承から現在の行事など、みなさんからの情報をまとめれば、その変遷や状況が見えてくるのではないのでしょうか。調査用紙などはすでにみなさんのお手元にお届けしていますので、たくさんの回答を寄せていただけるようお願いいたします。

締め切りは6月30日です。

4月18日(日)は交流会の開催日です。

昨年度の調査テーマ「蝶の分布調査」と「がまの調査」の結果報告では、文字では表現できないようなお話もしていただけると幸いですし、双方向の対話のできる雰囲気ですので、初めての方も誘い合わせて多数ご参加ください。

なお、ご参加の際には先にお届けしております各々の“フィールドレポーターだより”をご持参いただきますようお願いいたします。(少々は用意しておりますが)

平成16年4月3日

担当は 古谷でした

フィールドレポーター

掲 示 板



2004 年度第 2 号通巻第 31 号(7 月)

ボランティアメッセ 2004」に参加して

フィールドレポーター担当 楠岡 泰

5 月 4 日・5 日の両日、日本科学未来館(東京都江東区)で開かれた「ボランティアメッセ 2004:つながりあう未来のミュージアム」にフィールドレポータースタッフの方 5 名とともに参加しました。全国、北は北海道から南は九州まで 41 館の博物館(動物園、公民館などを含む)が今回のイベントに参加し、18 の館がブースを開設していました。琵琶湖博物館はフィールドレポーターの活動を紹介するポスター、チョウおよびタンポポ調査の結果などを展示しました。4 日午後行われた活動報告会で前田雅子さんが「琵琶湖博物館フィールドレポーター:博物館を楽しむ」というタイトルで発表してくださり、大変好評でした。夜おこなわれた情報交換会で何人もの方から琵琶湖博物館のとりくみについて聞かれました。

5 日は朝から一般のお客さんを対象にヨシ笛作りやチョウの親子あてクイズをしました。さすがに連休中の東京、持参した 80 組のヨシ笛セットはすべてなくなり、あわててヨシを切るはめになりました。残念なことに忙しすぎて他の博物館の活動を見る時間がありませんでした。

今回参加して、いまだにボランティアを安い労働力と考えている館が多い反面、兵庫県人と自然の博物館のようにボランティア組織を NPO 化して独立した組織として運営している館もあることを知りました。兵庫の NPO は独自の財源をもち、県や市町村の委託を受けて、調査やアドバイスも行っているそうです。今後琵琶湖博物館のフィールドレポーターやはしかけ制度について考えさせられたイベントでした。



よし笛作り

牧野久実さん 専門分野：民族学研究テーマ：湖環境の比較文化史的研究

小さい頃の夢は、考古学者か宇宙飛行士に

はずかしい
よよ！



約束の交流室で待っていましたら、にこにこしながら入ってこられた牧野さんに、「じつは、私が牧野さんに学芸員紹介のインタビューをしたいと言いましたのは、FR の名を編って私が、牧野さんからいろいろお話をお聞きしたかったからなのです」と伝えましたら、牧野さんは笑ってしまわれました。

考古学を扱われたのはなぜですか

牧野さんが個人で管理なさっている HP に『わたしは水辺が好き』という出だして、「神戸で生まれて瀬戸内の海になじみ、留学先のテルアビブでは地中海、今は琵琶湖を毎日眺めながら暮らしている」と載せておられます。

考古学を専攻なさっておられるのはわかりますが、なんで考古学なのか、なんでイスラエルまでなのかをお聞きしたかったのです。

それは、小さい時に遡るのですが、じつは私の父が貿易の仕事で、海外のいろんな所へ行くことが多く、とくに中近東が多くて、そこでいろんな遺跡を見たり、博物館を見たりして帰国する度にその素晴らしさを、私が幼稚園に行くか行かないかの時からずっと聞かされていたのです。

そういう物に対してもともと興味はあったところに、小学校に上がったとき、ある TV 番組で、南米のナスカ高原で地上絵の研究を一人でなさっているドイツ人の女性考古学者の番組を見て、小学校の低学年でしたが、いたく感動しました。ところが、凄い人がいる！と、翌日学校へ行って友達に話しても、なんとも反応が返って来ないのですよ、それで初めて、じぶんの興味をもっていることは人とは同じではないのだなということに気づいて、大きくなったら考古学をやってみたいというのが小さい時の夢だったのです。とほうもないことに興味があったみたいで、考古学者か、宇宙飛行士かどちらかになりたいと、思っていました。

そんな気持ちも中学・高校あたりでは忘れていましたが、高校卒業後ある機会があって世界各国を、3 ヶ月くらい歩いて周るということをやったことがありました。その間に自分の小さい頃の夢を思い出して、いろんな国の文化・多様な文化全般に興味を持ちました。そこで大学に入って勉強したいと思い民族学・考古学を勉強するために、初めて受験を

し、入学したわけです。一言でいうと、いろんな時代や地域の文化を比較しながら一般的なことを見つけて行とうという、そういう学問分野でした。

ですから当初から中近東の考古学に興味はあったのですが、同時に目末の考古学だとか、あと日本の村に行ってフィールドワークをしたり、いろんな事を同時進行でやっていて、わりとどれも結構面白くて愉しんでいました。

イスラエルに決められたのは？

そんなときに日本政府のお金で、イスラエルの、ある湖の近くに、発掘隊を送るようになりそうだというので、私がおの当時師事していた先生が、準備に行けということで放り出されてイスラエルで2ヶ月過ごしました。

基本的な知識も無く、生活習慣とか学術的な意味での知識も無いままに、多国籍の発掘隊チームの中に放り込まれているような経験をしました。そして「夏だけの調査だと本当のことが判らない、年間を通して季節感なども解りたい」と思い留学することになりました。

留学先として、アメリカの大学とイスラエルの大学の可能性がありました。アメリカに行けば理屈の上ではいい勉強が出来たとおもいますが、わたしはなににつけても現場主義なんです、発掘って生活を掘ることですから生活感ごと学ばないと解らないという、これはわたしの性格ですね。で、イスラエルに行った訳です。

(これはインタビュー後に発掘関連サイトで知ったのですが、テルアビブ大の厳しいことで有名な考古学担当教授が、牧野さんの試験結果の評価にA+を付けておられるのを、牧野さんの奨学金の推薦状申請に関わった別の教授が知って、それを言わずに申請されている牧野さんに驚かれたそうです)。

なぜイスラエルで中やその辺りでないのかがわたしの一番の心事だったのです。

わりと偶然です、日本のことをやっていると中国・韓国は近しい気がします。つまり『文化の伝播』みたいなことをよく言うでしょう。人が動いて物が動いて、近しいから似た文化が有ると言う考え方です。けれども全然接触がない地域なのに、なぜか同じような文化が生まれるということもある。それはなぜかという、その文化を育んだ自然環境や風土から来ている訳です。私の民族考古学では人・文化だけを較べるのではなくて、自然環境もまるごと含めて較べることで普遍性を追います。

ですから、いままで日本のことに興味を持って中国・韓国に関心が向いたことはあまり無く、まったく違う時空間なのに、共通項があるテーマを択ぶ場合が多いのですね。

キンネレット湖畔はどんなところ？

イスラエルは移民の国なので、ヘブライ語を教える学校が沢山あります。日本では全然勉強してませんでしたので、まずは学校に入り徐々にしゃべれるようになりました。

テルアビブ大学ではイスラエルの一般的な考古学の状況を学びます。

イスラエルは、遊牧民の、水が無い所での文化であって、乾燥地帯で人が暮らしててどういう生活をしてたかを学ぶのです。そんな頭でキンネレット湖に行ってみると状況がぜんぜん違い、完全に浮いていまして、イスラエルのそれ以外の所とは違って見えました。

なんかおかしいなと思い、そのおかしいな～と云う思いを抱えながら日本に帰国して、琵琶湖を見た時に、ふっと共通するところが見えてきました。

水のあるところの文化でしょうか、イスラエルの中でもキンネレット湖の周辺とそれ以外の所との関連性があまり見えないのに、むしろ、琵琶湖の周辺とか、他の湖の周辺との関連性が見えてくるのです。

キンネレット湖はイスラエル唯一の淡水湖で、広さは琵琶湖の25分の1くらい。アジア・アフリカ大地溝帯の最北部です。

琵琶湖博物館での牧野さん

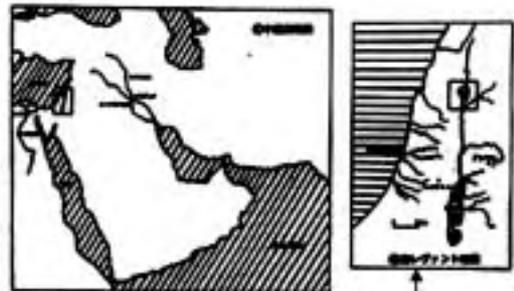
【博物館の準備室のときに出されていた「瓦版」の第一号に、用田さんが牧野さんを紹介する記事で、『ジャンヌダルク的存在』と紹介されていました。

あのころは丸子船の立ち上げでいろいろ議論もあったときだと思うのですが、そんな時に用田さんの言われるように、様々な人をまとめて一つの方向にもって行く才能をお持ちの牧野さんが大きな存在であったと思うのです。

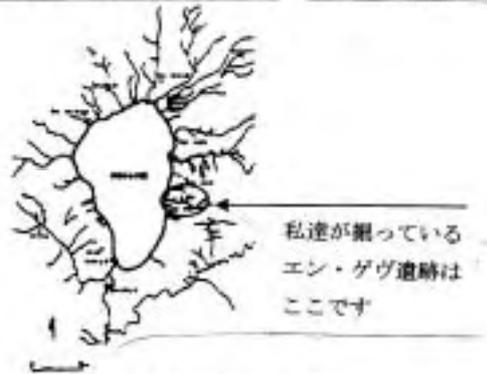
牧野さんは周りの人を変える人、うまく改革していく人だと丸子船探検の集まりでもみんな話題になっていました。】

丸子船に関わられての思いを

最初は歴史的にも意味のあるものだし、湖上輸送の主役として使われていた船である



イスラエルは2つの湖とそれを結ぶ川の西側あたり



キンネレット湖周辺の主な遺跡

ことで、丸子船を B 展示の目玉にしようとする程度は決まっていました。

B 展示室は広いし、細かいもので埋めるのは大変なので、大きいものが真ん中にどお～んとあれば目立つし場所も埋まるからと軽い気持ちでした。

西浅井には陸揚げした古いものもあるが、細かい作り方の記載資料はどこにも無く、船大工さんも何人永残って屠られる今なら、新しいものを作ることが可能だから、新しいものを造ろうということになり、建造過程を残して、将来に生かしたいとの思いも持ちました。

丸子船復元製作会の事務局として、堅田の松井造始さんに依頼しましたが、出来るといわれても、たしかめるすべもなく、年齢 80 歳代の船大工さんにすべてを賭けての丸子船作りが始まりました。

建造までのいろいろはありましたが、出来上がって展示交流していくうちに、思ってもいない効果が現われて、丸子船がもたらしてくれた効果に驚き、喜んでいきます。

担当の牧野さんは毎日がプレッシャーだったと思うのですが？

でもあんまり感じてなかったですね、当時は。深く考えずただ目の前で起こっていることをそのまま受け容れてたという、なんかそんな感じだったですね。後で考えるとアハハあんな恐いこととして...みたいな所が多い。

そのバイタリティーの素はどこから？

研究者であり母親であることは大変だと思いますが、そんな状況の中で、牧野さんが子育てをしながら仕事をして、資料を整理して出され、それでもって博物館の はしかけ 関連のあれこれをなさっている、このバイタリティーというのは、どこから出てくるのでしょうかね？

さあ～どうやってるんでしょう？普通にやっています。

知らないうちに周りに頼っています。例えば職場に子供を連れてくるとか、多大なご迷惑をかけていると思うんですよ。誰が言ったのか「子供は親を選んで生まれてくる」と、「この子はこういうわたしがよくて来たんや」と勝手に思っています。いま小学校 3 年生ですが、小さい頃ほどには手はかからなくはなりましたが、また違う意味で大変です。

いろんなものは基本的には博物館でします、家では仕事しないし、持ち込みません、本も置きません、子供との時間を大切にしています。

牧野さんの HP は、業績の発表もカラフルで、動く映像が楽しく見る人をひきつけます。

意外と私ね常に手間を省くことを考えていて、基本的にはチャランポランです、要領がいいのかも。ちょこちょこことやるのがわりと得意で、研究者の方は事業を苦痛に感じられる方も多いでしょうが、私は両方があってバランスがとれているような気がしています。

1歳の時、こんな暑いところに小さい子を連れてきてと

発掘現地の人が子供用の風呂を作ってくれるなど気を使ってくれました。イスラエルに「美味しいアイスクリームがたべられるよと」ごまかして、8歳までに7回連れて行きました。

子供さんも将来はお母さんと同じ道に？

いや～逆に嫌がるかも。手供と接していると、子供から学ぶことも多いです、こういう仕事をしていく上で、一般的な視点が持てます。企画展の準備の最終2日前に、子供を連れて来てチェックするんです、危ない所、面白い所など、子供が何をするのが良くわかります「バイト代もらっていいくらい」(笑い)

まだまだ沢山の事をお聞きしたかったのですが、お忙しい牧野さんの時間を一あまり横取りしてはいけませんので、最後に写真をお願いしまして、絶えず笑顔で答えてくださり、とても充実した楽しい時間であった牧野さんへのインタビューを終わりました。(このレポートには載せてない多くの事柄をどうしてみなさんにお知らせしようかと考えています)



イスラエル エン・ゲヴ遺跡の発掘現場

東京科学未来館に行ってきました

FR 山崎 千晶

こういったイベントに足を突っ込むきっかけを与えてくれたのは、二年前三田の「人と自然の博物館」からの呼びかけに面白そうだと参加したのが運のつき?かもしれません。今回は東京お台場にある東京科学未来館で祭りがあるので来てほしいとの要請があり、ちょっと遠いけど...と思いつつ。参加される館の顔ぶれも関東方面からが多いのと、各館のボランティアの位置づけや活動内容のリサーチと展示の仕方、交流・見物・問題点の発見と解決の糸口がつかめたらという淡い期待と、もちろん琵琶湖博物館をピーアールしてくるぞ~という意気込みもあり、今後の活動の参考になる事が発見できればと思い夜行バスで東京へ乗り込みました。

東京科学未来館は宇宙飛行士の毛利衛さんが館長で、ボランティアスタッフの登録が800人!!実働100人(場所柄と館の内容によるものか、若さあふれる学生が八割)の運営力と企画力、とにかくパワーがあります。科学展示の解説には専門性を必要とするので勉強会はあるものの、年配の方は平日、学生は週末参加を予定しているが、学生はすっばかす事も多く、世代間の溝は多少あるとの事。半径四キロ内は交通費支給(以前は昼食費あったが廃止)学生はボランティアに登録していると就職活動に有利との事

5月4日は展示の準備と各館の交流会があり、琵琶湖博物館のはしかけとFRはボランティアではないという発表には大変興味をもってもらえました。

たとえばこういったイベントを琵琶湖博物館で開催するには、スタッフが足りないと感じる反面、FRの活動はボランティアではない、やりたいから、面白いから、発見があるから、楽しいから活動に参加しているという思いがあり、自由に活動出来る場所を提供していただいている琵琶湖博物館に感謝します。

今回のようなイベントに参加する時は人数が少ないと、(今回は7人)お客様の相手で手一杯で展示場から出て他の見学や交流の時間を持つことが難しく、私は前日の準備前と当日の開館前にどんな感じかパンフレット集めと写真を撮っただけで、やはりゆっくりとは見られなかったのが残念です。館内展示は、深海2000・DNA・スーパカミオカンデの一部再現・アシモ・宇宙実験装置・ロケットエンジン・ミニモノレールの原理等様々でした。各館展示は紙すき体験・拓本・カルタ・地域ガイド・ワークショップ・蜂蜜しぼり等と、やはりパネル展示だけの館は影が薄いようでした。確かに、準備して参加は大変でしたが、参加した人にしか味わえないものがありました。来年の秋頃には山口県萩市でも同様なイベントを予定されているようですので、興味を持たれた方は行ってみられませんか?

ボランティアメッセ 2004 参加報告

FRS 森 擴之

今年のミュージアム・ボランティアメッセは日本人初の宇宙飛行士である毛利衛さんが館長を勤められる日本科学未来館(東京お台場)において、「つながりあう未来のミュージアム」をサブテーマに、5月4～5日の両日開催されました。

参加ミュージアムは北は北海道から南は九州までブース展示18、ポスター展示23館に達し、ニューヨークからアメリカ自然史博物館のポスターセッションへの参加もありました。

琵琶湖博物館フィールドレポーターもボランティアメッセへの参加は今回で3回目となりましたが、博物館から楠岡さん、育木さん、フィールドレポーターからスタッフの前田さんほか4名の計6名が参加し、「自然を大切にし、自然から命の大切さを学び、自然と楽しく遊ぼう」をメインのテーマとしたポスター展示(フィールドレポーターってなあーに、琵琶湖博物館周辺で見られるチョウたち、タンポポの分布、はしかけ)に加え、来訪者参加型イベントとして「よし笛作り」と「蝶の親子探し」を出展しました。



5月5日の一般公開に先立ち、5月4日16時より参加団体ボランティア全員が参加して、活動報告会が開催され、代表3団体(江戸東京たてもの園、琵琶湖博物館、明治大学博物館)からそれぞれの活動報告が行われました。

琵琶湖博物館からは、前田さんが「人、物、情報が交流する博物館をみんなで一緒に創っていこう」とする当館の姿勢と、そのプログラムである「フィールドレポーター制度」ならびに「はしかけ制度」についてそれぞれの活動内容を、すばらしいスライドを示しながら紹介され、参加された多くのボランティアの皆さんから、琵琶湖博物館のこの特異な制度と活動内容について、注目の的となりました。



琵琶湖博物館の活動報告をされている前田雅子さん

活動報告会終了後、情報交換会が催され、参加者それぞれが、水割り片手に活発な意見交換が行われ、お互いに今後の活動のあり方などについて大いに参考となるべき情報を得ることが出来たことと思います。

なお、この会の最後に、萩市郷土博物館から来年のメッセ 2005 は是非、萩で開催したいとの、立候補声明がなされました。

翌5日10時からの一般公開では、当日が雨降りであったこともあり、特に午後に入り来訪者数も多くなり、予想通り来訪者への応対、特によし笛作りの指導にテンテコマイの状況が続き、他館のブースを訪れ出展内容などを十分に観察することが出来ず心残りでした。よし笛作りに参加してくれた来訪者は100名を越す盛況ぶりでありました。

一方、蝶の親子探しでは、昨年三田で行われたメッセと比較して、参加する子供たちの数も少なく、さらに正解率も極端に低く(同伴された親達も含めて)、東京の子供たちの自然と接する機会の少なさがうかがえる結果でありました。

最後に、今回のメッセ参加にあたり、展示パネル作成、よし笛の材料提供などを含めて、多大のご協力を頂きましたフィールドレポーター・スタッフの皆さんならびに博物館職員の皆様方に、心より御礼申し上げます。

以上



展示の準備に大忙し、FRのみなさんたち



もう萩へ？ 山崎千晶さん



琵琶湖博物館の展示ブース

ここに掲載の写真は山崎さんほか参加者のご協力で構成いたしました。

ボランティアメッセ2004に参加して

草津市 肥土 真子

好奇心に駆られて万障繰り合わせて参加させていただきました。その受けた感動、インパクトに比して、ここに書き表すことの難しさであえて少ししか書くことができないことが残念です。



建物



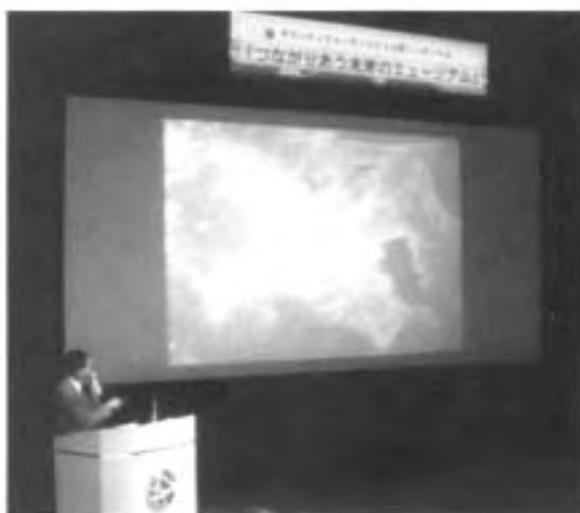
展示物

毛利館長

昼間は人は見えないけれど、夜、明かりで人の存在がわかると。この青い地球上に、たくさんの方がいる。博物館を生涯学習の場として生きたいなど興味あるお話でした。

前田さんの発表

私たちの代表が毛利さんと同じ壇上に立ったのです。



ネルディスカッション



いろいろ、ボランティアについて考えさせられる内容でした。

この前の座席に座って毛利館長はこのディスカッションを静かに聞いておられました。

毛利館長は各ブースにも来てくださったそうです。素敵なお方だった....
そうです。

その時私はなにをしていたのか、長野県のとがり石博物館のブースで、時間のかかる物を作り始めてしまって、あせっても出来上らなかったのも、必死で石を削っていました。(自身反省せよ)。

そして驚くべきことにたくさん琵琶湖博物館のブースにやっ
だされたこと。

7階の、風雨強い悪天候の中、
には見ることがたくさんあるのに、
て、感動して。



の人が
てきてく

下の階
と感心し

今静かに振り返ってみて、今後できることを考えています。参加している方々、みなさん光り輝いていました。皆さんが楽しんでいました。もっと時間がほしかった。

おわり

『蝶の調査』その後

守山市 森 擴之

昨年の「庭を訪れた蝶の調査」には、多くのレポーターの皆さんから調査結果をご報告いただきましたが、今年の蝶は如何でしょうか。

今津の角井さんからは、今年も今津方面の蝶の飛来を連絡頂いております。

3月29日に箱館山林道でツマグロヒョウモンが、4月30日に弘川でベニシジミが、さらに石田川ダム上流で、ベニシジミとミヤマカラスアゲハが飛来していたそうです(ミヤマカラスアゲハは昨年の調査では、どこからも報告されませんでした)。

守山市内(三宅町)でも、3月15～17日にかけて、キチョウ、モンシロチョウ、ウラギンシジミおよびツマグロヒョウモン、28日にキタテハ4月に入って16日にベニシジミ、ヤマトシジミが休耕田のれんげの花に、さらに5月7日にはクロアゲハが庭の柚子に飛来しております。今年ミスジチョウが庭の生垣に飛来しました。(5月末)

6月に入り、梅雨の季節になりました10日にはジャノメチョウも訪れてくれました。

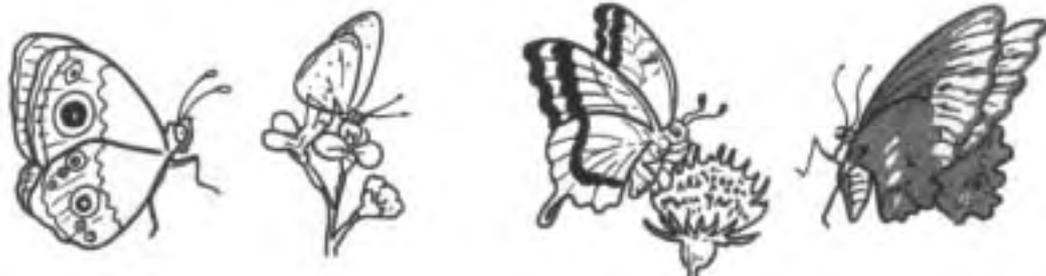
ところで、昨年3ヶ所から報告された「ナガサキアゲハ」は今年はどうでしょうか。この蝶は目下日本列島を北進中であり、今年どうなっているか非常に興味を引くところです。

ナガサキアゲハは大型の黒い蝶で、しっぽ(尾状突起)を持たないのが特徴です。高いところを飛んでいても、比較的容易に見分けがつきます。もし見かけたら、場所と日付(出来れば写真)を掲示板に投稿して下さい。

なお、インターネットが使える方は下記アドレスにアクセスして見て下さい。昨年の調査で、大津の江尻さんが採集して下さったナガサキアゲハの標本写真を掲載させて頂いております。

以上

http://briefcase.yahoo.co.jp/m_familyitm



年中行事調査の締め切りが迫りました

みなさんをお願いしています、年中行事調査の締め切りがせまっています、まだの方は出来るだけ早くお出しくさるようお願いします。

これまでに頂いた報告を整理していると、いまお住まいの地でこんな行事が行われ、あんな行事が無くなっていったんだということがよく判ります。

新しく作られた行事、わが家だけの楽しい行事なども見えて、それに参加なさっている家族の皆さんの微笑ましい様子が浮かんできます。



昔はあったのにいまはもう無くなった行事に、懐かしさと淋しさを込めた報告をみますと、その行事にかけて居られた想いの深さを知らされます。

社会状況の移り変わりとはいえ、なんとか継続できないものかとの思いにも駆られ、行事は季節の節目とも重なって、儀礼的な意味合いのものから、日常のイベント的なものへと質的变化が始まっているのではないかと、みなさんからの報告を読んで考えています。

私の住んでいます所は昔から在る、純然たる集落ですので、各種多彩な年中行事が継続して行われてきましたが、それでもやはり今の社会状況にそぐわなくなった行事は、すこし手直しをしたり、日時を移したりして、できるだけ住民の参加し易い形態に改めるようになってきました。

みなさんの所でも同じような悩みを報告されている方もあり、今の時点で記録しておかねばもう採録できなく、永久に埋もれてしまう行事もあるのではと思います。それを復活できなくとも、せめて記録だけは保存して後世に残すのが今の私たちの債務であると思いますので、出来るだけ多くの行事についてお知らせ下さいようお願いします。

新たに初められた、わが家だけのユニークな行事もぜひお願いしたいです。しかつめらしいものでなく、完全にマイホーム的な創作行事のいろいろをお知らせください。ある方から、「湖畔を走る毎日マラソンを見に行く」のがわが家の年中行事ですとお知らせいただき、そういうのも有りかと、固定観念にとりつかれている頭に新鮮な衝撃を与えられ、とても感銘しました。今のわが家、わが地域の年中行事をお知らせいただくことで、後々21世紀初頭の近江人の生活の句読点を検証することが出来ると思いますので、みなさんからの報告をお持ちしています。

表 題【 白花ホトケノサは突然変異？ 】

投稿日【2004.4.23】お名前【草津市町村 中後佐知子】

4月3日に畦道で ホトケノサ・ヒメオドリコソウ・イヌフグリの
シロタンをひきつめたように咲き乱れた中に、一むらの白花
を見つけました。それがホトケノサと同じ形をしている。
白花のホトケノサを始めて見た。種類としてあるのか、
突然変異なのか興味津津です。教えて下さい。

表 題【 ハイナ科 - グロバイ 】

投稿日【04.04.28】お名前【野洲市町村 Toyonaga 】

あの木の名前は 何だろうと思...始めて 5~6年たち、
今年やっと判明した。 4~5月に白~薄い花が
段上に咲き、山桜や ヲウチ、ウツヒザクラなど
と一緒に咲き終わった頃に、忽然と表わす。
とて目立って 岡麓下調べても 分かりず、フーヤ、
シロ-ク-になて 解明しよと思...て...、先日
「山溪」のホトケノサには 山の全図像の中にその木を
見つけた。

平地のヒトツバ Tongue fern (fern:しだ)

04.05.23

大津市 有田 重彦

広島にいる山好きの親友が、こちらの山城に登ると、石垣に必ずヒトツバが茂っているけど何故だろう、毛利勢など武士の往来で種が拡がったのだろうか。博物館で聞いてくれないかとのことで早速、布谷さんにいろいろお話を伺いました。友人もエンジニアで、これがシダ類の植物とはと、驚いていました。小さな胞手が風で飛び散ったり、あるいは武士の着物などに付着して拡がったのだろうと思われます。

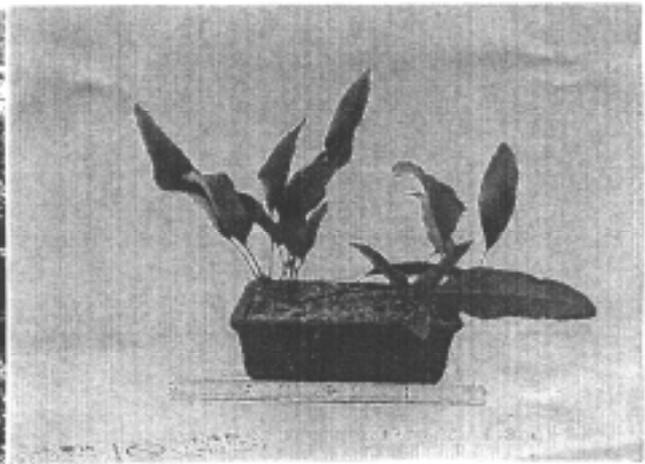
県内では三上山に茂っているよとのことで、友人が来宅したときに、見にいこうと登ってみました。御上神社側登山道の岩場の上に、沢山の見事な群生が拡がっていました。三上山近くの小学校では、遠足で登ることがあるとか、ご存知の方も多いのでは。

去年は、この友人と安土城跡に登りましたが(行ったと言う感じの高さ)、ところどころの石垣にやはりヒトツバを見つけました。根っこを石の上に這わせて日に当たるのが好きみたいです。では比叡山延暦寺の、穴太^あの組の元祖が築いた石垣にはどうだったかなと、5回ほど登った記憶をたどりませんが思い出せません。ヒトツバを知る以前では、それを見ても見えないということでしょう。

今日、突然本文を書き出したのは、今朝、用事で日吉台小学校に行った帰り、校門横堀際の植栽の木の根元の周りに、ヒトツバの群集(長い方で約2メートル)を見つけたからです。

ヒトツバは平地でも大群落を作るとのことですが、30年ほど前に作られた学校であり、一本の木だけに見られることから人為的なものと見るべきでしょうか。3年ほど前の三上山で採った一茎を小鉢に植えていたものが大きく育ち、17枚の一つ葉が茂るまでになったので一緒に写真を撮りましたが、こちらは大群落にまで、少なくとも大鉢一杯にはと願っています。

参考:ヒトツバは、ウラボシ科の常緑性シダ。胞子葉はやや幅が狭い。胞子嚢は葉裏一面を覆う。茨城以西に広く分布。山地の日当たりの良い岩上、樹幹に着生。漢方で使わ



れる。

表 題 【旧草津川廃川後の調査をなぜ行わないのか?】

川の流れがとまったあと、川底はどのように変化しているのかご存知ですか?

投稿日 04.04.08. お釈迦さんの花祭りの日

[草津市 Kさん]

教年前から草津市内の町の上を流れる旧草津川の廃川(水が流れなくなっからの川底の変化に興味を持っています。朝早く起きて、川が流れていた砂地をJR草津駅近くのトンネルの上の堤防から湖岸まで6キロの道を歩いています。

私も還暦を過ぎたので、疲れます。6キロ歩いて、終点の山田港から路線バスで帰ってきます。あまり話題になっていませんが、草津川の流れがとまった跡の砂地の変化です。昨年の夏はイタチでしょうか小動物がいっぱいいました。そして蟻地獄。生物同志の生存競争のすさまじさを見ておりました。面白い課題なのに。

表 題 【旧草津川について思うこと】

投稿日 [040622]

[草津市 市古谷 善彦]

私は旧草津川流域から100mくらいの距離のところに住んでいますが、今更ながらに思うことば、2年ほど前までは旧草津川の跡地利用について、広報や地域の集会の時に盛んに取り上げられて、大学の教授を座長にフォーラムも開かれ参加したこともありました。

最近、それらのニュースも疎遠になっているようですが、砂川大橋の辺りから下流では堤防に立ち木が相当ありましたが、この暮辺りに全部切り取られました。堤防の草刈も定期的に業者によって大掛かりに行われており、また地域住民による一斉清掃など費用対効果の視点から見れば、きれいとは云えないまでも、それなりの管理は行われているのではないかと思います。

すでに具体的な跡地利用案は提案され検討されていますが、グローバル規模で、将来の環境影響などを充分考慮して決められることを望みたいです。



旧草津川、JR線上方より上流を望む。一面草むら状態 04. 6 写す

フィールドレポーター7月・8月・9月の予定をお知らせ

7月03日(土) 定例会 : 於: 琵琶湖博物館交流室 10:00 ~ 17:00
7月17日(土) 定例会 : 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~ 17:00
8月07日(土) 定例会 : 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~ 17:00
8月21日(土) 定例会 : 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~ 17:00
9月04日(土) 定例会 : 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~ 17:00
稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

フィールドレポータースタッフから一言

本格的に梅雨の季節になりました。今年の梅雨はメリハリが利いているようで、雨の日と晴れの日が交互に来て、ジメジメとした長い日が続かないのでありがたいと勝手に思っています。でも季節外れの大型台風が6月21日、滋賀県の真上を通過し、被害にあわれた方々には大変のご苦勞であったことでしょう。

この時期は野山に行くとひっそりと咲くササユリやヤマアジサイの白と緑のシーンと静まり返ったハーモニーが聞かれます。また、カキツバタの紫色と緑の掛け合いの調べにも会えます。ほっと癒されるときです。

地球に、一生物として生かされていることを、よきにつけ悪しきにつけ、感じております。

5月4、5日に東京で開催されたボランティアメッセ2004に万障繰り合わせて参加していただいた方々、事前準備から当日のご活躍本当にご苦勞さまでございました。琵琶湖博物館の「はしかけ」「フィールドレポーター」活動が注目を集めたと伺っております。ありがとうございました。

今年第1回フィールドレポーター調査の「我が家の伝統行事調査」は6月末で締め切りました。7月からは第2回調査「アブラゼミとクマゼミの調査」が始まりました。調査表を掲示板と一緒に配布いたしました。生まれ故郷の九州ではおなじみのクマゼミの鳴き声が身近でどの位聞けるか、ぜひ探しに出かけてみようと思っております。皆さんからも、鳴き声を聞いた情報をたくさんお願いいたします。

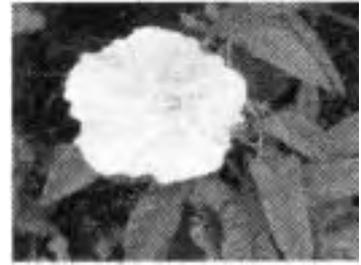
また、交流会を今年は秋に企画検討中です。皆さんのご意見、ご希望がございましたらお寄せ願います。お待ちしております。

以上今回の担当は草津市の椋島でした。



フィールドレポーター

掲示板



2004 年度第 3 号通巻第 32 号 (9 月)

C 展示室フィールドレポーターコーナーを一新

フィールドレポーター担当 楠岡 泰

琵琶湖博物館 C(環境)展示室フィールドレポーターコーナーの展示換えをレポータースタッフの皆様が行っていただきました。これまで、1999 年および 2000 年に行った田んぼの生き物調査の結果がずっと展示してありました。せっかく毎年いろいろな調査を行っているのに、その結果を展示しないのはあまりにももったいないことです。フィールドレポーターの目的は結果をとおして身近な自然や生活について見直すきっかけを作ることですが、発見した事柄を多くの方々と共有することも、もう一つの目的です。博物館には展示という最高の伝達手段があります。これからは結果の結果がまとめ次第、展示換えを行っていきたいと思います。また、インターネットを使っての情報発信も行いたいと思います。



今回の展示は昨年行った「庭を訪れたチョウたち」の調査結果です。

結果のまとめを担当して下さった森さんが展示の原案からポスターの印刷まで行っていただきました。また、パネルの作成には多くのレポータースタッフの皆様が参加していただきました。

学芸員紹介シリーズ(12)

戸田 孝さん(地球物理学)

8月18日交流室にて肥土マサ子

終始、にこにこしながらたのしくお話ししてくださいました。パワーにあふれた、ソフトなこころの方の印象です。お忙しくしてらっしゃいますがおもに研究室(2階)におられるそうです。



今博物館の中でどのような仕事をされているのでしょうか。

戸田さん： なにをしてるんでしょね。(にこにこ笑う)

一応公式には研究部の博物館学研究領域、それと事業部の情報センター。博物館学は、博物館はどうあるべきか、博物館をどういうふうにやっていくべきかという分野なんです。十分に体系化されていないところがあって、きちんとおさえていかなければいけないということで、琵琶湖博物館の研究部としてやっていくことにしています。

仕事のほかに、いろんな研究をされていますね。滋賀の地理とか。

戸田さん： 地図をながめるのが好きだから、ながめているとなんとなく頭に入ってくるんです。(にこにこ)なれてくると、道の形でいろいろわかってくるんです。細い道でも妙につながってる、そういうのはだいたい旧街道なのです。物理をやってても、“立体的にイメージが浮かぶというのが得意なこと”が役に立っているんですが、それが地図の見方にもつながってる。学校の“社会”はだめだったんですよ。でも、歴史のドラマなんてすごく好きなんです。流れのイメージができてくると、わかってくるのかな。地名でもある程度見ているとパターンがわかってくるでしょ。そのあと地図について解説した本を見て、ああこういうことだったんかと、またそれを、地図をみるのにフィードバックして。そうするうちに滋賀県の中はなんとなくイメージがわかってかってくるようになりました。完璧にはもちろんおぼえてないんだけど。それから琵琶湖博物館の書庫には便利な本がけっこうあったりね。何冊か見ると、あ、この本にこんなことがか

いてあるとかがわかってきたら、じゃあこういう問題はここ見たらわかる
と、頭にはいってくる。目的もなく眺めていたら、いざというときひょい
と出てくるようなことがありますね。

戸田さんの子供時代はどこで過ごされたのですか。HPでは外国で生まれたと
ありましたが。具体的な国名は？

戸田さん： ははは、うまれたところは半年しか居なかったからおぼえてないも
ん。

(リポーター:さらにくいさがって)国名は？

戸田さん： アメリカ合衆国、イリノイ州。エバンストン
わー(内心:アメリカ生まれ!)

戸田さん： (笑って)イリノイってどこかわかりますか。

(!だいたい・・・)まんなかのへん・・・。

戸田さん： 一番大きな町はシカゴ、シカゴの北隣の町です。

お父様のお仕事の関係ですか。学者さんだと・・・。

戸田さん： 数学者です。大学の先生で短期間留学するっていうのがあるんです
ね。現地にいて何かテーマを決めて、だれかについてやるわけなんだけども
3年いたのかな。

少年時代はどんな自然環境で過ごされたのですか。

戸田さん： 町の中ですよ。大阪市内なんですけども、たんぼがどんどんなくな
って家になっていくような感じの時代、ちょうど今の草津駅の辺りにちかい
ようなところあるなど。

道は舗装道路があんまりなかったのを、ちょうどぎりぎりおぼえているくら
いの頃。

そして“社会”などがにがて?(多感な時代の様子を少し聞く)

戸田さん： いや、定期テストなど決められた範囲で(いわゆるつめこみ教育)
テストされるのはだめなんですよ。範囲が無いのならいいのです。ゆっくり
覚えたのは忘れない。

(能動的な記憶の仕方なんだと...おもわれます:レポーター)

受験のための言葉は残らないですね。

いま面白いとおもわれているのは何ですか。

戸田さん： 複数に興味広がっていくんです。(笑う)

とりあえず先目、科学教育学会というのが(孝)って、そこへ行ってきたんです。
博物館と学校の連携について話をしてきました。もともとその学会にかかわ
ったのは、回転実験室のことをどっかで発表したいな、と思ったからなんで
すが、継続的に参加していたら、教育学の専門の人たちの間で、“博物館をど
う使っていくか”が大きなテーマになってきて。“こんなことやるけど、やら
ないか”というような声がかかってくるようになって。

伯母川探検隊(青地町公民館のそばに展示室がありました。地区の子供の伯母
川の魚の展示があり、琵琶湖博物館の指導でした。)がありましたね。

直接かかわってはいなかったけど、一步引いたところから見て他の学芸員さ
んの行動を見ていて、面白いなと思った。

学校現場と博物館の目的の違いなど、学校と博物館のそれぞれのあり方の違
いを生かした連携というのが必要なんじゃないかという語をしてきました。

開かれた博物館になるということですね。外へも出る。

琵琶湖が北へ行くについて(未来の姿がどうなっていくのかをお聞きしました。)

戸田さん： 器(うつわ)が動くようにそのまま北に移動するわけではないのですよ。

琵琶湖が北に行くというのは、北の地面が下に引っ張られているのですよ。地殻変動としてうごいている。

文章で書いてもらったほうがわかりやすいので、また機会があれば、かいて欲しいです。

戸田さん： (笑う)むずかしいな、下手なこと書くと里口君におこられそうだし・・・(わらう)。

琵琶湖でも水の満ち引きがあるかという研究をなさったとHPでみましたが、おもしろいですね。満ち引きはないそうですが、波は確かにありますね。

戸田さん： 波でもね、かざ波とうねりのちがいはわかりますか？
...?

戸田さん： サーフィンするのうねりですよ。おおきいの。

かざなみというのはその場か近くで吹いた風ですぐおこるなみ。うねりというのは、たとえば湘南海岸で来る波は、もともとどこできているのかというと、赤道をこえてむこうです。

波の性質がぜんぜん違うのですね。サーフィンができるような波には琵琶湖ではないのですよ。

日本海側と太平洋側では見た感じが違う。

戸田さん： そうそう、日本海側でもサーフィンできるところはほとんどないはず。

物理というのは、そういうひとつひとつの現象をどういうことだと調べていくのが基本です。感じというのが大事なことでね、なんか雰囲気や遠うなというのを、なぜ違うと感じるのかということまで考えるということ。何気なく見過ごしていることもきちんと理由と仕組みを探るのがサイエンスというものだから。博物館はそういうところの面白さを伝えるところだとおもっているのですよ。

琵琶湖と日本海と太平洋の海の感じのちがいをもう一歩掘り下げるところにサイエンスがある。

どういうふうにしらべるのですか。

戸田さん： 自分でやった仕事ではないけど。昔、北太平洋で波の観測をやったひとがいてね。

波は伝わってくる間にかわってくるんですよ。だからひとつながりの波が荒い波から細かい波に変わっていく時間を測ると波が何キロくらい旅をしてきたかがわかる。あとは向きがわかれば、どこで起こった波が伝わってきたかがわかるんです。

実はインド洋で起こった波が、オーストラリアの南をまわってきたのです。地球儀をみてください。アメリカ西海岸とインド洋の間に直線が引けます。

えー、そうなんですか。(内心おどろき:間にごちゃごちゃと島があったようなと...))

戸田さん： 地球儀を実際に持って、回して考えてください。地球って(南北方向を手で示しながら)こっちにも丸いんですよ。

10年ぐらい前に東京大学を退職した人が書いた本にいろいろ載っています。

注

話はかわりますが、フルートをされているとか。

戸田さん： もともと音楽がすきやったけど、ピアノ練習していたし。

どんな曲を演奏されますか？

戸田さん： 吹奏楽で、今度マーラーをやるし。交響曲5番です。(にこにこ笑いながらおはなししてくださいました。個性的な方々と、長岡京のほうで活動されています。)

お子さん何人ですか。子供さんは何に興味があるようですか。

戸田さん： 男の子2人、上が小学校1年。私の小さい頃と同じようなものに興味を持つようで...

フィールドレポーターとあまり接する機会が少ない戸岡さんですので、いろんなお話が聞けてたのしかったです。

まだまだ戸岡さんのお蔵の中には、高度なこと、たのしいこと、いっぱいありそうです。

これからもよろしくご指導ください。今後のご活躍を期待してます。

注 永田 豊 著 ハワイの波は南極から一海の波の不思議

丸善(1990) ISBN 4621034723

152ページ 19 cm X 13cm

あとがき： 琵琶湖博物館の中には生き生きした人たちがいるんだなという感想です。

そんな方たちと交流することによって、知らない世界を知ることによって、私たちの生き方に、豊かさが加わるのではないのでしょうか。チャンスがあれば、またお話を聞かせていただきたいと、おもったことでした。またフルートの演奏も、ぜひみなさんに、披露して欲しいとも。



ガマ調査続報

ガマ調査担当 前田 雅子



昨年の冷夏が懐かしいほど、今年は7月早々から暑い日が続きました。

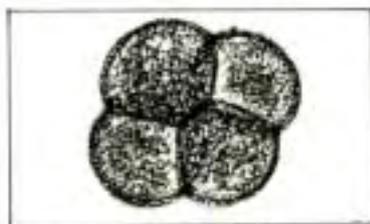
2003年『ガマを探そう調査』では皆さんの熟意とともに、天候にも助けられて充実した調査ができましたが、一つの大きな課題を残していました。

「本当にコガマに間違いないか?」という同定(種の判断)の問題です。

外見がよく似るガマとコガマは、最終的には花粉の形(ガマは4つの花粉がくっついた4集粒、コガマは一つひとつ離れた単粒)で同定されます。けれども調査にあたっては、レポーターの皆さんに花粉の採取をお願いせず、花の時期と葉幅などの部位サイズだけで区別していただきました。湿地または水中に入って花粉採取する危険を避けるため、良い状態の花粉が採れるのは2,3週間程度と短いためです。滋賀県にコガマは殆どないといわれており、出てこないだろうという甘い予想もありました。



コガマの花粉



ガマの花粉

ガマの写真は角野康郎著
「日本水草図鑑」より

ところが、7~8月に琵琶湖東岸域でコガマが12件報告されたのをはじめ、9~10月には湖西地域、湖北地域、甲賀郡も加わり、最終的に県のほぼ全域から29件(25地点)もの報告が寄せられました。どれも葉の細さや全体の雰囲気からコガマを推測させましたが、2地点以外は証拠となる花粉がないので断定できませんでした。そのため、結果報告の『フィールドレポーター便り』には、[コガマに違いないと思われませんが~]というあいまいな表現で分布図を示すにとどまりました。

コガマの花粉を求め県内一周

そこで決着をつけるため、2004年の夏、報告のあつて25地点をまわって花粉を採り、再同定を試みました。昨年の調査で、コガマの花の初見は7月13日、花粉を採るには7月末までが勝負だとわかっていました。博物館に生えるコガマが7月10日に花粉を放出しているのを見て、急いで7月11日~13日に25地点を回ると、県南部では多くの地点が花期に入っていたのに対し、県北部(彦根駅以北、安曇川以北)はどこも葉が繁るだけで、花穂が出ていませんでした。県北部の花期は、今年は7月20日頃は始まりでした。



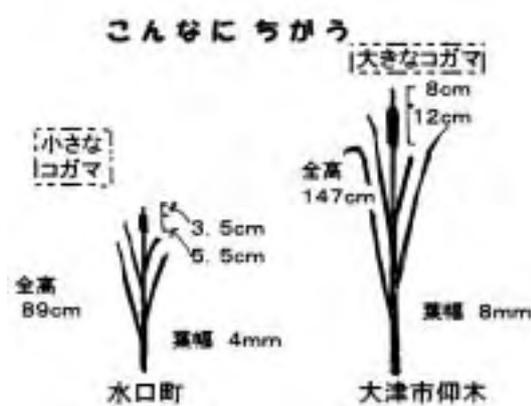
やっぱりコガマでした

7 月末まで調査を行ない、花粉サンプルが採れたのは 23 地点です。それらを博物館の芦谷美奈子学芸員に同定していただいた結果、全サンプルが単粒花粉で、すべてコガマと同定されました。同定に花粉は不可欠ですが、ある程度は外見でも区別できると分かって、正直なところホッとしました。

心残りは、花粉が採れなかった 2 地点です。

安土町の池ではコガマと思われるる個体を見つけたものの、岸から遠くて採れず、マキノ町の沼では昨年生えていた位置に今年は姿が見られませんでした。また、昨年「コガマではないかも・・・」と調査票を撤回された米原駅東の地点を調査したところ、コガマが確認されたことをお知らせします。

よく見れば、コガマはあちこちに！



同定の結果から、改めてコガマの分布と環境をとらえました。

1. 報告数は少ないものの県全体に散らばって分布している。
2. 生育環境は休耕・放置田 9 地点、河川・水路 8 地点、池 1(十未同定 2)地点、公園 2 地点、草地 2 地点、埋立て更地 1 地点である。どの環境においても、靴で歩けるような乾き気味の湿地～水深 10cm までの浅い水中に見られ、ヒメガマやガマよりも浅く、乾いたところに生える。休耕田に多いのは、ガマと共通する。
3. 大津市の公園は植栽が疑われ、守山市の水路は植栽を砒認できた。それ以外は自生と思われる。

『滋賀県で大切にすべき野生生物 2000 年版』には、「湿地の埋立てや河川改修で自生地が失われている」として、コガマが“その他の重要種”の一つに挙げられています。今回 23 地点(花粉による同定ができなかった地点を含めると 25 地点)で確認されたことにより予想以上に生えると分かりましたが、コガマが広がっているのか、あるいは調査方法や努力量の違いによるのかは明白ではありません。広がっているとすれば、肥沃な湿地である休耕田や、多自然型の河川改修など、コガマにとって魅力的な新しい環境が生まれたことによるのでしょうか。ただ、パイオニア種として入り込んでも、そこに定住できるかは限りません。新草津川でガマ類が一気に広がりましたが、このまま大きな群落に育つのでしょうか？マキノ町のコガマは、もう出てこないのでしょうか？ 皆さんからのガマ便りをお待ちしています。

表 題 【ガマの花にきた、傷ついたブイブイ】

投稿日 040801

中主町 安井 加奈恵

昨年のガマの調査をきっかけに、もう少し近くで見たいと、二種類のガマを植えました。ひとつは、昨年の調査で種不明と報告したもの。 もう一種はまだ見ぬコガマを期待して、葉幅の細いものを選び、その成長を楽しんでいます。そんなある日、思わぬ出会いがありました。

7月3日、ガマのメバナは、春浅い木々の新芽のように、みずみずしくやさしいみどり色です。オバナは、くちなしの実で染めたようなからし色。ふかふかにふくらんでいます。花粉たっぷり。この花粉がお薬になるという。

そのオバナに一匹のブイブイがとまっていました。頭をもぐりこませ、花粉まみれになっています。しかしブイブイのようでありながら、その体が何かちょっと違う。うん？…うーん、ブイブイは重傷です。黒くつやつやと光る前ばねがない。背に見えているのは透明な後ばね、それに片方はちぢれたようになっている。うまく羽化できなかったのだろうか。ガマは水を張った桶の中にある。痛みを背負いつつ、このガマへたどり着くまでの、歩くこと、飛ぶことの難儀を思うとせつない。

ブイブイは朝からオバナに顔をうずめて花粉を食べていたが、昼ごろにはメバナに移って一心に食べ続ける。7月のやけどしそうな太陽の光を背に浴びても動じず、食べているガマの穂が風に大きく揺れても、片方の後ろ足でそばにある葉をさりげなくつかまえ、私がおぞき込もうがカメラを向けようが一顧だにしない。

一昼夜と半日、オバナ、メバナを交互にひたすら食べ続け、メバナの三分の一を食べつくすと、穂から離れてガマの葉陰でしっかり眠りました。

因幡の白兎を彷彿とさせるこのブイブイに薬効がありますように。

それ以後、因幡の白兎=ガマ、だった私の頭は、淡海のブイブイ=ガマ、におき換わり、同時にブイブイの忍耐と集中力に脱帽し、併せて、幼い頃の体験からブイブイ=ウンチ、と思っていたブイブイの名誉が回復でき、長ずるに及んで上上です。



7月3日、花粉にまみれて
まずお薬を



7月3日、メバナもおいしい
たんとおあがり



7月4日、葉陰で、ほっ
ぐっすりおやすみ

中主町の安井 加奈恵さんの原稿写真を拡大編集させていただきました。
(担当 FRS 椋島)



7月3日花粉に
まみれて
まずお薬を

7月3日メバナム
おいしいたんと
おあがり



7月4日葉陰、ほっ
ぐっすりおやすみ

表 題 【セミの調査に思うこと】

投稿日 【040829】

名 前 【草津市 古谷 善彦】

近畿地方は 6 月 6 日に平年並みの梅雨入りをしましたが、日照り続きのまま7月13日に空梅雨で梅雨明けしました。その後の暑さは連続真夏日の記録的な猛暑でしたが、お盆を過ぎた頃から朝晩の空気のさわやかさに秋の訪れを感じるようになりました。

日中は肌の出ているところは痛いという感覚すらありましたね。

そんな中7月13日に湖北方面のマキノ、近江中庄、今津方面へ夏のセミ調査を兼ねて行きましたが、予想に反してセミの声はまったく聞けなくて、地元の人々の語では「梅雨があけたら一斉に鳴き出すよ」と云っていましたが翌日セミが鳴いたと聞いて巧みな自然の摂理に改めて感心しました。

去年は、梅雨が長引いたせいか京都でのことですが、セミの鳴き声を7月15日に聞いたと言う情報もありました。

今もツクツクボウシの鳴く声を聞いていますから、最盛期は遠ざかりつつあるようです。この暑さで私のセミ調査は生活圏内にとどまり、描いていたところまでは到底足を延ばせないまま終了となりそうです。

その描いていたところとは、静寂に包まれたお寺か神社の境内でセミ調査は勿論ですがそれが済めば、時を忘れて静かにせみ時雨を堪能したいというささやかなことでありながらも、頭の中で描いていた貴重なあこがれのひとつでもあったのですが、実は芭蕉の心境を少し味わってみたかったのです。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声 松尾芭蕉

セミを今回の調査に取り上げられたことによって、身近な現象を意識しながら、より多くの人々が環境の変化、温暖化などに関心を持ち、それらの改善や維持への努力、協力の輪を少しでも広げることにつながればセミの存在もセミ調査も偉大ですね。



8月10日草津市穴村にて

表 題 [愛知川下流は「鯉」の「恋路」?]

投稿日 [040706]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

7月2日7:30頃、愛知川の栗見橋～湖岸道路(mesh code 305236-6150)の右岸より、川の中央の中洲付近でコイの産卵行動を見ました。

中洲の岸辺のヨシの根元がやっと水に浸かる程度の浅瀬で何者かがのたうちまわり、ヨシの若葉を揺らして大きな水しぶきを上げていました。水しぶきは石油缶よりも大きく見えたので、高さ・直径とも50cm程はあったと思います。

ここでは今までに見たことが無いのですが、ヌートリアでも住み着き、これが戯れているのかと思い、スポッティングスコープを構えましたが正体は不明。

しばらくして2頭?2尾?は連れ立って上流に泳いで行きましたが、金色がかった大きな鱗が見えました。かなりの大物、一匹は50cm程、他の一匹は40cm程と見受けました。

この辺りでの投網漁の魚籠にソウギョやレンギョ、アオウオなどを見かけませんのでコイだと思います。

只、解らないのはサメの背鰭の角を丸めたような、丸みを帯びた三角形の鰭を水面から出して泳ぎ出したことです。コイの背鰭はこの様な形ではないし、背泳ぎで水上に胸鰭を出しても、尻鰭の上半分を出しても非常に泳ぎにくい筈です。???

そして、ほんの30mほど上流の、粗い礫の岸辺に乗り上げて、全身擦り傷だらけにならないかと余計な心配をさせる程の組んず解れずを繰り返していました。

先ほどの中洲にはすぐに別のカップルがやって来て、又々水しぶきを上げていました。

この後も次々と琵琶湖から遡上して来そうです。

この辺は「鯉のデートコース」「デートスポット」「鯉の恋路」だ!

間違いない!

- * 私の出身地、茨城県の霞ヶ浦周辺では金色がかったコイを「野鯉系」銀青色がかったものを「飼い鯉系」と呼び習わしていますが、これに現実には、どれほどの意味があるのでしょうか。???
- * 霞ヶ浦の面積は琵琶湖の約1/4、最大深度は僅かに約7mですので、大部分が大きく育つ前に捕られてしまうせいか、釣り師が数年間も夜討ち朝駆けを繰り返して通り詰めても80cm級の鯉を釣り上げれば一生の自慢になります。
- * 済みませんが、魚に詳しい学芸員さんをお願いします。上記の???の2ヵ所に解説を頂けないでしょうか。

表題 [聞こえて来ませんか「祇園精舎の鐘の声」?]

投稿日 [040706]

名前[彦根市 加固 啓英]

彦根市の北部、愛知川と宇曾川の周辺(mesh code 305236-61XX)辺りの河川堤防などが4月下旬ごろまで、背丈程もある黄色い花で果てしなく埋め尽くされ、思いでの「菜の花畑」を再現してくれました。5月に入ると一斉に多量の種子を付け、紫紅色がかかった茎の根元から枯れ出しました。

これは多分、アブラナ科のセイヨウカラシナだと思います。

3~4年前には、少数の株が河川敷などに点々と疎らに生えていただけのように記憶しています。その種子も風で散布されそうにもなく、小鳥が運ぶ様子も見られなかったのですが、すごい勢いで分布・群落を拡大しています。不思議なことにアブラナ科でありながら花の盛りにもその周囲にモンシロチョウが殆ど見られませんでした。

一株持ち帰り油で揚げて見ましたが、葉・茎・花、とも柔らかい部分は美味しく食べられました。堅い部分を食べようとすると口の中にヘチマダワシの様な繊維質の塊が残ります。これを相棒犬のトラに食べさせたところ見事な巨大ウンチを生産しましたので消化器内のモップ掛けにはなると思います。

雑草の中のセイヨウカラシナの株の元は、小さな「円形脱毛症」状に周囲の雑草が無くなっていました。

表題の「祇園精舎の鐘の声」ですが「盛者必衰のことわり...」「奢れるセイタカアワダチソウは久しからず」と続くのです。

長年、破竹の勢いで分布を拡大し、他の植物の侵入を許さなかったセイタカアワダチソウの群落に挑むように、当てつけがましく繁茂地が重なっているのです。

セイヨウカラシナは草丈も大きく、日光を遮り多量の水分や肥料分を奪っていると思いますが、開花・結実・枯死、までの期間があまりにも短いので、どれほどのダメージとなるのかは今後を待つ事とします。

* たまたま漫然とテレビを見ていましたら「運搬中にこぼれた遺伝子組み換えセイヨウカラシナが野生化した」との話題が有りました。事の起こった場所は聞き漏らしましたが問題点は除草剤に耐性のあるセイヨウカラシナが自生することで「周囲の栽培種が受粉・雑種化しないか。」と「野生化したものの種子から栽培することが生物特許上の問題にならないか。」とのことでした。

*セイタカアワダチソウやセイヨウカラシナは周囲の土壤環境に「イヤミ物質」や「イケズ・ホルモン」を分泌し合い、互いに嫌がらせの応酬をしているわけではないのですか???

学芸員さん周辺情報を教えて下さい。

表 題 [後 日 談]

投稿日 [040714]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

以前の投稿の後日談です。

その 1

私の住む住宅地の 1971 年(この辺りで最も古い電柱に表示)以前に造成した地下の、下水道工事で掘り起こされた水田の土を水の入った容器に採り、観察したのですが肉眼で見えるサイズの生き物は何も発生しませんでした。

その 2

セイトカアワダチソウのニッチを脅かすか？ セイヨウカラシナ(多分香辛料のマスタード。菜の花(アブラナ)のそっくりさん。)との攻防のその後です。

セイヨウカラシナは完全に枯れて種子は莢には残っていません。大量の種子が根元に蒔かれている筈です。

セイヨウカラシナの日陰になっていた部分のセイトカアワダチソウは、後から生えたとされる 30～40cm 程度の小苗状の株となって生えそろうています。(セイヨウカラシナの影響のない所では人の肩程の高さになっています。)

セイヨウカラシナの枯れた株の元は路地が小穴状に露出したり、住宅の周囲の雨水溝の U 字溝程の幅で草が枯れたりしています。

多分これから当分は邪魔物のいなくなったセイトカアワダチソウの天下でしょうが、その後(来年以降)あたり一面に大量に蒔かれているであろうセイヨウカラシナの種子の反撃はなるか？

興味ありましたら、皆さんもご近所を注意して見守って下さい。

Te1&Fax

0749-43-2576

加 固 啓英

フィールドレポーター9月・10月の予定をお知らせ

09月04日(土)定例会:於: 琵琶湖博物館交流室 10:00～17:00
09月18日(土)定例会:於: 琵琶湖博物館交流室 13:30～17:00
10月02日(土)定例会:於: 琵琶湖博物館交流室 13:30～17:00
10月16日(土)定例会:於: 琵琶湖博物館交流室 13:30～17:00
10月30日(土)研修会:於: 近江今津(いまづ自然観察クラブ)
<稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。>

フィールドレポータースタッフから一言

速いもので、もう九月になりました。今年の夏は、オリンピックで大いに盛り上がっているうちに過ぎてしまったような気がします。

今年の第2回目の調査「夏のセミの調査」は皆様いかがでしたでしょうか？大いに自然の中に飛び出して、セミを追いかけて楽しまれたでしょうか？私も小学生以来になりましょうか、網と虫かごを持って駆け回りました。

今まであまり気にかけていなかったセミの鳴き声が、今年は歩きながらも街路樹からよく聞こえ、こんなにもクマゼミが鳴いていたのかと、びっくりしました。

そして、もう今はセミの鳴き声はぴったりやんで、夕方になるとアオマツムシのにぎやかな合唱が聞こえてきました。

季節は着実に移っている。フィールドレポーターに登録してから特に季節への感じかたが敏感になってきたように感じています。

今回の担当は草津市 椋島でした。



滋賀県立
琵琶湖博物館
交流センター
〒525-0001 草津市下物1091
TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
E-mail: freporter@ibm.go.jp

フィールドレポーター

掲示板

2004 年度第 4 号通巻第 33 号 (11 月)



今津での研修会

フィールドレポーター担当 楠岡 泰

10 月 30 日に今津で行った研修会および「いまづ自然観察クラブ」との交流について報告します。午前中は有志でそば打ち体験をし、午後から交流会を行いました。まず、レポータースタッフの山崎さんに活動紹介をしていただいた後、いまづ自然観察クラブ副会長の前川さんからクラブの活動について説明を受けました。いまづ自然観察クラブでは今津周辺のエドヒガン(サクラの一種)の分布調査を行っているそうで、より広い地域での分布情報に関心をお持ちとのことでした。それに対し、フィールドレポーターで来年春県内の分布調査を行ったら、という意見が出ました。エドヒガンはサクラの中では長寿な方で、有名な薄墨桜など、大きな古木のほとんどがエドヒガンだそうです。

当初、今津の里山を案内していただく予定でしたが、あいにくの雨のため、箱館山スキー場近くの三谷集落を案内していただきました。タバコの乾燥小屋の見学の後、集落の中を散策しました。とても水が豊かな地区で集落のあちらこちらに湧き水があり、洗い場として今も使われています。また蔵の多い地域でした。蔵といえば土壁というイメージがありますが、土壁だと火災には強いですが、風雨にさらされると劣化します。土壁を板で囲めば、風雨には強くなりますが、延焼を受けやすく、蔵本来の耐火性が失われてしまいます。そこで考えられたのが蔵の土壁の表面を板張りにして、数本のクサビを抜くと板壁が簡単にはずれる構造だそうです。津田さんが気がつかれたのですがクサビは竹でできていました。竹は燃えやすいため、もしかすると延焼を受けた場合、クサビが先に燃え、板壁がはずれやすくなるのかもしれない??? 昔の方の工夫には驚かされました。



今回の交流会を開催するにあたり、フィールドレポーターであり、いまづ自然観察クラブの会員でもある平井さんをはじめ、いまづ自然観察クラブの皆様いろいろなお骨折りいただきました。厚くお礼申し上げます。エドヒガンの例にみられるように、交流がきっかけとなり、新たなテーマの発掘に結びつくこともあります。これからも交流の機会を増やしていけたらと思います。

わが家・わが地域の年中行事のまとめ経過報告

津田 國史

皆さんからの報告をまとめる作業に手間取っています。

いまになって、調査用紙の設問が不十分であったことを悔いているのです。

報告を書いてくださった皆さんはもっと困っておられたことと思います。

わが家と、わが地域とに分けての年中行事の調査でしたが、ほとんどの方から両方の報告を頂きました。わが家で 114 件、わが地域で 131 件でした。

この文では、わが地域の報告から感じた事柄をお伝えします。

事前の予測では、地域での年中行事はかなり減っているのではと考えていましたが、そうではなく、意外に多くの行事が行われていることが判りました。ただし農村地域と、新興住宅地域とでは数の差が出ました。農村地域の方がはるかに行事の数が多く、新興住宅地では少ない傾向が見られ、年中行事という事柄の性質から云って当然の結果だと納得しています。

その農村地域からの報告の多くの方が、地域での行事に人が集まらない、人手が足りないと報告され、これからもこの行事を継続していくことに不安を感じて居られるようです。参加者の減少は、新興住宅地でも同じ傾向がみられ、地域社会での行事に参加者が少なくなっていくことに焦燥感を持って居られる方もあり、地域のまとまりのためとせつかく始めた行事が重荷になっている様子がうかがえました。

農村地域の行事の代表的なものの一つに、祭礼がありますが、昔から継続して行われ、その行事が地域社会での求心的役割を担ってきたことは確かなようです。その行事が終わった目からもう次の年の用意が始まり、一年をかけて準備してきた行事は、その地域の人たちの意識の底に宿り、その目に支障をきたす事柄に直面すると、ああこの目は地域の行事の目であった、この日はそのために空けておかないといけないのだ、と行事を優先させる生活規範が出来上がっていました。それは、地域を離れて都会に出た人たちにも、この行事は故郷に帰って参加するのだとの思いが強く、行事に参加することが地域に生を受けた者として当然の事柄になっていました。この暗黙の呪縛をわずらわしいと感じるかどうかは、報告をいただいた方の年代によって、地域の年中行事に対する反応が異なるようにみられました。

この農村地域での年代差による年中行事への意識の違いは、新興住宅地域ではほとんどなくて、年中行事に参加するか、しないかに単純に分かれていたのも興味をおぼえました。

まだ十分にまとめていませんので、このような報告で申し訳ありません。

研 修 会 の 報 告

まさに、フィールドが博物館

前田 雅子

私達フィールドレポーターと同じような活動をされている団体は、県内にたくさんあるようです。今年の研修会は、「自然を愛し、自然のしくみや里山の文化・生活を学び、それを紹介できるインタプリターになろう」を目標に活動されているいまづ自然観察クラブを訪ね、三谷集落を案内してもらいながら交流しました。

昼から雨が降り始めるあいにくの天気にもかかわらず、フィールドレポーターから 21 名、いまづ自然観察クラブからは 7 名が参加。双方の活動報告に続いての意見交流では質問や情報提供が次々に出て、予定時間はあっという間に過ぎました。

そば打ち体験

箱館山といえば、スキーとそば！そこで、研修会オプションで、そば打ち体験を行いました。参加者は 17 名。四角に延ばすはずが丸くなったり、うどんのように太い麺が混じりながらも、先生のていねいなご指導で楽しくそば打ちすることができました。『同じ釜のメシ』ならぬ『同じ鉢のソバ』の味は、どうでしたか？ 初心者でも意外に美味しくできたように思いますが、そば打ち名人の楠岡学芸員のグループはさぞ美味だったでしょう。



“こね”の前の“水回し”



真剣に“のし”に取り組む

いまづ自然観察クラブの多彩な活動

いまづ自然観察クラブの前川さんが活動を紹介してくださいました。公民館講座の修了生が会をたちあげられたそうで、現在会員は 46 名、今津ビラデスト周辺をメインフィールドとする自然調査の他、エドヒガンの保全活動や、ザゼンソウウオーク等の事業を実施されています。年間 1000 円の会費を払えば誰でも参加 OK。それを聞いて早速入会されたフィールドレポーターがいらっしゃいました。

交流会で情報交換

フィーノレドレポーター活動の紹介は、山崎さんがされました。いまづ自然観察クラブの方たちはやはり調査結果に興味を持たれたようで、ナガサキアゲハの特徴を尋ねたり、朽木村にもガマが生えていたと教えてくださったり、さすがは自然観察クラブ員。地元の情報に詳しく、話は尽きませんでした。

最後のほうで「湖西で普通に見られるものが、他の地域では見られないことがある。またフィールドレポーターで『こんなものがあります』といわれて初めて目にしたり、意識することがある。」という主旨の発言をされたのは、フィールドレポーターでもあり、いまづ自然観察クラブ員でもある平井さんです。確かにその通りですね。

三谷集落の自然や民俗

雨が降っていたので各ポイント間は車で移動しながら、三谷集落の自然や民俗歴史を見聞しました。

タバコ乾燥小屋...小さな“小屋”を想像していましたが、壁の厚さが20cmくらいのどっしりした建物で、集落内のあちこちに残されていました。葉タバコ生産をされていた古谷さんから建築する際の工夫や、等級を上げるための温度管理や葉の並べ方など、就業者ならではの話が聞けました。

湧水とカワト

箱館山のふもとの三谷集落には、湧水を利用したカワト(洗い場)があります。現在もきれいに保たれていましたが、昔のように使われていないのでしょうか。「今の子供は、この水は飲めない」とおっしゃっていました。



巨木のタブノキ...ヤマノカミサン(山の神)は、幹径1mはあるタブノキでした。集落の氏神さんだそうです。

エドヒガン

エドヒガンとオオシマザクラを親にして作ったのがソメイヨシノです。エドヒガンは少なくなった言われますが、いまづ自然観察クラブ顧問の松見先生は、「古木といわれる桜の樹は、エドヒガンが多いのではないか？ フィールドレポーターで調べてもらえたら...」とおっしゃっていました。普通の桜の樹皮は横縞模様ですが、エドヒガンは大きく生長すると、ナラ類のような縦裂が生じるそうです。

また、花の下部が膨らむことでも区別がつくそうです。



樹皮に縦の裂け目が出る



いまづ自然観察クラブのかたは、自然や社会を自分が楽しむだけでなく、インターネットを目指しておられます。また、自然・社会環境を保全しようと、エドヒガンに巻きつくツルを払い、使われなくなった民具の収集などの活動をされています。一歩先を行く活動でした。

さらに、“本当の博物館はフィールドにある”を改めて実感させられました。集落に残された「カワト」は水草が生える生活具であり、それを利用する(した)人の記憶と記録が残る貴重な資料でした。タバコ耕種生産の記録や道具も、今では国内で消滅寸前ではないかと思います。

レポーターの皆さんも、それぞれ何かを感じられ、収穫を得て帰られたことでしょう。皆様、お疲れ様でした、そして、いまづ自然観察クラブ会長の村田さん、事務局の前川さん、準備段階からお世話になった平井さんにお礼申し上げます。

葉タバコ乾燥小屋の思い出

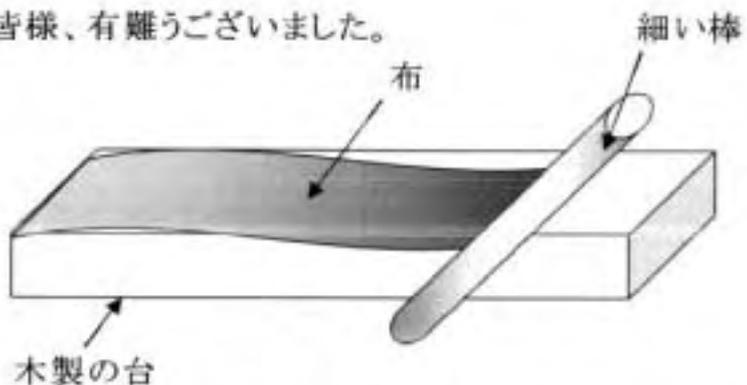
041106 森 擴之 守山市

戦後間もない子供の頃、父の郷里(愛知県渥美半島:父の弟が実家を継いでいた)で、葉タバコを栽培しており、夏休みなどに収穫した葉タバコの乾燥を手伝わされたことを懐かしく思い出しました。

当時は、食料をはじめ何もかも品不足の時代であり、タバコもその例外ではなく、父は破れたりして、等外品となった乾燥された葉タバコを貰って来て、そば切の要領で、タバコの葉をきざみ、手作りのタバコ巻き道具で、紙巻タバコを作って吸っていたことを、昨日のように思い出さして頂きました。



今津自然観察クラブの皆様、有難うございました。



手作りのタバコ巻き道具

表題 「秋の一日湖西今津の里山を訪れて」

投稿日「041102」

名前「尾形 勇 志賀町」

十月三十日(土)朝早いうちから小雨天候は悪し、しかし今日の会は雨天決行とありただ外回りの見学が駄目かなーと すこし気に懸かりながら JR 線で今津に集合時間の10時半一寸前に着いたが、改札口には、すでに博物館の楠岡さん等と今津町側のお世話する方も待っておられた。程無く到着した、新快速で椋島さん他揃い 車に便乗し先発隊の待つ町総合運動公園の中の各種体験交流館へ、

今日の交流会は今津町の方で「いまづ自然観察クラブ」のメンバーのお世話で行われることで、牛前の部は待望の「そばうち体験」出来上がりのそばを正味することが一番の私の眼目、すこし卑しいかなあ……

ところで本番の体験 指導員の指示に従い、そば粉や水の混ぜ方、捏ね方などなど全くの初体験の私には手もつけられぬ、四人一グループなのが幸い楠岡ご夫妻と山崎さんは少なからぬ経験者でどんどんやってのけ小生なにもせずに一時間余で指導員の合格の「名品おらが蕎麦」が出来上がってしまった。申し訳なし。 とて、さっそく作品を頂戴することとなり、何もしない私も一丁前にわけ分を貰い = ちょっと洒落た言い方で = ご賞味といったところだ = 旨かった!味 最高!

午後の部はいまづ視察クラブと我々との双方の自己紹介と活動状況の PR 続いて外回りの里山見学となったが、小雨のなか箱館山ふもと(三谷地区)に展開する地元の戦後の暮らしの様子を代表するタバコ作りの家の乾燥小屋、湧水豊かなこの地区の幾箇所かの水源および水路と貯水溜を見て この土地の人々が水を大切にしておられるその気配り、行き届いた施設に関心すると共に、この清くて、美味しい水に恵まれておられるうらやましさをつくづく思った。

なお神社の巨木たらの木、江戸彼岸、しいの木……いづれの木々も樹齢をしらぬもただ荘厳さ偉大さ、に重みがのこる感ひとしおだった。

今日は 本当に素晴らしい一日を過ごさせていただきまこと幸せでした。関係者皆さんにお礼をもうしあげます。

表題【秋のFR研修会に参加して】

投稿日【041103】

名前【草津市 古谷 善彦】

10月30日(土)湖西の今津町で開催された研修、交流会に参加して見学では、いまづ自然観察クラブの皆さんの懇切なお世請で三谷集落のタバコ乾燥小屋、豊富な湧水、巨木そしてエドヒガンなどを案内していただきました。

タバコ乾燥小屋では所有者である古谷 儀一郎さんから、タバコの栽培の経過や自給自足に足りる豊富な農地を先祖から受け継ぎ、今日に至るまでの苦労話などを織り交ぜて、ご本人が当時を振り返りながらお話しくださったことが鮮明に印象に残っています。

集落の面積は極小なのに至るところに自然があり、それをクラブの方の説明を聞いて又改めて感動するということの連続でした。

見学は雨の中での行動でしたが、それを感じさせない程中身の濃い内容で雨もまた良しの感覚でした。

豊かな知識をご披露いただいた、いまづ自然観察クラブの益々のご発展とエドヒガンの滋賀県内分布調査の実現を期待いたします。



三谷集落のメインロード



湧水池



古谷 儀一郎さんと葉タバコ



乾燥小屋の屋根

表 題【 交流会に参加して】

投稿日【 041030 】 お名前【 栗東市 Miyu 】

たばこの乾燥小屋はなんとなくつかしい感じ！

海あり山ありの島で生まれ育った私にとっては

イカの乾燥小屋を思い出される所でした。

“湧き水に感激”

「山（植物）が元気だから水が元気

水が元気だから山（植物）が元気」

正にこれですね！

エドヒガンザクラ是非見たいです！

表 題【 湖西の交流会】

投稿日【 041030 】 お名前【 志賀町 奥村恵子 】

湖西の交流会ということで、始めて参加させていただきました。

フィールドレポーターとは名ばかりで、気まぐれで調査に参加。

今回は家に暇している父84歳と一緒に“たばこ小屋”に引かれて来ました。

湖西で活動しているグループに、いくつか参加してみても、交流やネットワーク化ができれば、楽しいかな...
と思っています。



いまづ自然観察クラブの方との研修会に参加して

山崎 千晶

10月30日(土 雨の中、今津総合運動公園内にある「体験交流センターゆめの」にて午前は蕎麦打ち、午後は研修会が行われました。

たばこの葉乾燥小屋では、貴重な話をうかがいました。

戦後の食料難時代も納まりはじめた昭和29年頃から、葉たばこ栽培を導入され、当時集落には約40軒の家と畑250反・田450反と山があり、塩以外のほとんどが自給自足でき、経済的には恵まれていましたが、タバコ栽培は仕事も多く、米栽培後のスキー客相手の民宿とが主な収入源でした。

ところが、たばこ葉はナス科のために連作障害を起したのと、栽培者の高齢化、昭和49年の湖西線開通にともなう生活の都市化により、今たばこを栽培しているのは一人だけとの事でした。



タバコの葉を乾燥させる時

胡麻粒よりも小さいタバコ種を、まだ雪のある2月ごろに撒き、苗づくりして定植して6月に芯止めをし、8月の朝5時ごろから下側の葉から順に収穫をはじめ、土と竹と木とワラで出来た土蔵で外気を遮断した所に入れて、2Mの縄に110枚くくりつけたものを240連吊るし、まきを焚いて鉄管の煙突に煙を通し間接的に熱を与え、嗜好品として良い物を作るためには、蔵出しまでには96時間あまり加熱、中骨(葉の軸)まで乾燥させるには、ゆっくりと



マキから灯油になった時の道具

3 昼夜かけての乾燥が必要で、最後の夜は天窓を開け朝まで自然にさまし、触っても崩れない適度に湿らせるのが一番のかん所で、雨の日は葉が湿けすぎると、茶色く品質の悪い物になるので大変気をつかう作業であった。秋から選別して、専売公社に買い上げてもらえるまで蔵で保管し、仕事量としては多かったが、タバコ栽培は安定した収入源となっていた。

里山の生活を見学 嫁入り道具には洗い張り板・洗濯たらい・味噌樽と聞き、エドヒガン桜を観察 日常にはない目新しい事に好奇心をくすぐられ、初めて「なつめ」も食べられて楽しかった。今回の交流会では有意義な時間をもて、関係者の皆様には大変感謝しています。

表 題【 農業も面白いです。 】

投稿日【 16. 8. 26 】お名前【 マキノ 市町村 中川 徳司 】

長い間勤めた会社を この春退職し副業の農業が本業になりました 勤めの傍ら寸暇を惜しんで農作業をしていた頃と違ってたっぷりある時間の中で周りを見る余裕が出来ました 改修されて大分年月のたつ川には 自然が戻って梅花藻の白い小さな花が沢山咲いています。(私の小さい頃には金魚藻と言ったと思いますが) この春 田圃の水口の石の下に体長10数センチの山椒魚を見つけました。溝川にはザリガニやタイコウチやクロドジョウやヨシノボリや子フナや蛭等も沢山います。草むらには怖いマムシやシマヘビ、カエルもいますしカメが道を 横切っています 5月の雨の日には体長50~60cmのナマズが20匹余りも田圃の中へ産卵に入りました。しばらくしたら3cm位のなまずの稚魚とおたまじゃくしが数え切れない位育っていました。8月には3cm位のイナゴも見つけました 気をつけていると 今まで気にしなかったものがずいぶん見えてきます

表 題【 タンポポのこと 】

投稿日【 040831 】お名前【 野洲 市町村 Toyonaga 】

4月に近畿一円のタンポポ調査に参加した。あちこちで集めた割には無駄にして提出できなかったものが多い。それ以外にも、今年ほど注意を払ったことはなかった。近郊の田が陽に咲き乱れた。ひょっとして最後の示威かと思えば、ほらほらと誇った体等は、来年はもうコンクリートの下にたどりし、都市化が土地を提供し、近代的な街に変化した後、強くたくましくなって、陣内を2つや3つ咲き出さし。きっとまたかわいいタンポポ!!と云われます。

表 題 [野生化アスパラガス、その他]

表 題【2004 へちま 情報】

投稿日【041104】お名前【びわ 市(町)村 梶本 さつき】

5月2日に、へちまの種を蒔きました。畑を耕し、約80cm四方の場に30粒ほど適当に蒔き、蒔いた時だけ、水を300ml/杯分かけておいただけでした。とても元気な芽が出て、なめくじにも食べられる。健康かな苗の育ちました。へちまは、暑さ、大好きな。大きく成長し、雄花は、収穫するまで毎日、次々と咲いてきました。

10本定植した苗から、50本ほどスタイルの良い、へちまが収穫でき、コロン水は、4升採取しました。

キッチン、お風呂、洗面所、野菜の洗い場など生活のあり方で活躍する。朝夕の肌への保湿に欠かせない化粧水。

昨一年、へちまの不思議なパワーに支えられ、元気に生きられると心なごませているこの頃です。

猛暑に耐えるパワーの、へちまの秘密を知りたい人。

投稿日 [040722]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

Ju1y/22 愛知川右岸・栗見橋～湖岸遺路(505236-6150)の水際に、野生化したアスパラガスの茎立ちが10本の株を見つけました。外にも数箇所生えている様です。小さな花や丸い実も付いていました。可食部以外はあまり手に取ったり近くで見たことはないのですが、多分カーネーションに葉を添える観賞用の品種ではなく野菜だろうと思います。

この辺りは外来種や野生化した野菜・園芸種が種にして60～70%に達しているように見受けられ手の施し様のない生態系の河川敷なので、気楽に考え時機を見てグリーンアスパラガスの山菜採りを目論んでいます。

同日、愛知川右岸・葉枝見橋～湖岸道路(505236-6143～6150)を車で通過しますとずっと続いてアブラゼミの声でむせ返る様です。それでも堤防内側は外側に比べて少し静かな様です。堤防の内側は年に数回は冠水しますので、ここには飛来した分だけで現地産卵分は死に絶えるのかも知れません。又、堤防内の河川林や放置草原ではキツネやアカネズミは見かけますがモグラのトンネルは見たことが有りません。

表 題 [ウンチについて熱く語って良いですか?その 1]

投稿日 [040808]

名 前[彦根市 加 固 啓英]

(第一語) 数年前のある朝、自宅から相棒犬トラを散歩に連れ出そうとした時、かなり乾燥した糞を犬が蹴って崩してしまいました。その割れ目から、やや大型で偏平な甲虫が現れました。前脚の、人に例えれば肘から手首までを思わせる部位の外側にギザギザがありセンチコガネの仲間かと思われまふ。以前に庭でこんな甲虫を見かけたことは有りません。出来ることなら直ちに「ドクターランプのアラレちゃん」の様にこの糞を観察したかったのですが、その時、垣根越しにお隣のご主人に挨拶されたのです。

変人、奇人扱いは容認出来ても危険な人物と目されたのでは今後のご近所付き合いにも支障を来しますので挨拶もそこそこにその場を離れました。帰宅後横目で垣根方向を確認し、ウンチを調べたのですが、既にそこに甲虫はいませんでした。

以来バッファロー(アメリカバイソン)やニシンの群れの帰ることを信じる古老の心境で待っているのですが未だに現れまふ。庭中に一種が一頭だけということか?

*センチコガネって変にバタ臭い名前に思えまふか?

センチサイズのコガネムシなのか、センチメンタルジャーニーの途中で我が家に一泊した甲虫なのか??? 広辞苑(第5版)でコガネムシを見ると「黄金虫」「金亀子」「小銭」ではない、コガネムシは金持ちな虫だったのです。センチコガネを見ると「雪隠金亀子」の漢字に出会います。なんと!!センチコガネはセッチンコガネ、やはりウンチとの縁の深い名前でした。でもこれを全部読める人がどれ程いるの?

(第二話) 私の耳にはブーイングの音が届きまふので更に続けさせて頂きます。

「お国を離れて何百里～」2002年8月、東モンゴルへ行って来ました。

果てしなく続く大草原の片隅で「牛糞」と「馬糞」をじっくりと見比べて来ました。

牛糞は均一に柔らかく、良く消化されていましたが、馬糞には細胞膜が破壊されず未消化の切り藁状の植物の茎が多量に含まれていました。これは牛の反芻の効果を示すものでしょう。良くすり潰され、消化器官内の微生物により生分解された結果でしょう。

* 私の子供時代には街中でも牛車や馬車が運搬に使われていました。(私は今年65歳・四捨五入すると一世紀人間をしています。)路地裏の角を曲がると突然馬とのご体面。その横を擦り抜けることは子供たちの冒険の入門コースでした。町中で牛馬を飼っていた家は知りまふが蹄鉄鍛冶屋(装蹄店)は街の中にあり、その仕事も見知っています。それでも牛・馬の糞の違いは覚えが有りません。

日本が今の北朝鮮に酷似した食料事情の時代に、遠路はるばる食料を運んでくれ、私達の家族が餓死から救われたのは、父方からの霞ヶ浦の船便と、母方からの馬車の運搬力に負うところが多かったように思いだします。命の恩馬にも感謝。

どうでも良いことに、とかく等級を付けたがることの例えで「牛の糞にも段がある」と言う言葉が有りまふ。だが、その段の最上部は牛の肛門、こんな輩が無意味な差別社会を作りたがるのです。

「ウンチ」についての「蘊蓄」をもっと続けても宜しいでしょうか?

表題 [近江流 屋上緑化工法]

投稿日 [041005]

名前[彦根市 加国 啓英]

温暖化・ヒートアイランド現象の対策として屋上緑化の話題をよく耳にします。しかし建造物の屋上に草木を植え、育つ条件を整えるということは、建造物の耐荷重、漏水対策、強風時の樹木等の倒れや飛散の事故対策等の問題にも費用にも相当の覚悟が要ります。建築業・造園業にはビジネスチャンスでしょうが施工主にとっては大きな負担増になるはずです。

そこで、毎年発泡スチロールのトロ箱の水田稲作を続け、ムベの挿し木を育てている、私流の「絵に描いた牡丹餅」的屋上緑化方を紹介します。

屋上の遊歩道以外の場所に泥と水を入れた、箱状の容器を敷き詰めます。浅く水の漏れない、例えばセメントを捏ねる容器のような物の転用です。これで建造物の屋上は、水温の低い水底の泥に覆われたこととなります。ここには稲を植えます。稲は季節毎に趣を変え十分に鑑賞価値のある植物です。そして琵琶湖へ流入する川や水田の水路で簡単に掬い取れる雑魚の稚魚を放します。これはカ(蚊)の発生対策で、流れの岸から熱帯魚等の水槽の管理に使用する小さな網で取れ、種類不明の雑多な3~6mm程のルーペで確認しピンセットで扱いたくなるような微細なものですが、秋までには3cm以上になり、それぞれの種類の特徴がはっきりします。カ(蚊)の卵とボウフラ対策に抜群の効果があります。稲を刈り取った後では魚の生態観察が楽しめます。泥底から水面までの深さが.25cmだとすると屋根面の耐荷重は0.3ton/m²以下で済みます。計算も安全性の説明も必要ない明白さです。更に日よけとして軽量なアルミパイプ等で支柱を組み、ムベなどの常緑蔓性植物を這わせれば、ここで憩う人の為の日陰となり、葉面からの水の蒸散面積をかせぐことが出来ます。樹木ですと多量の土の搬入が必要ですが一株ごとの鉢土で済みます。ここで拘りたいのが雨水(天の恵みの天水)の使用です。屋上面積に降る降水量のみでこれらの全てが賄えるとは思いますが、水の必要量に増減があること、及び水頭差(ヘッド:水を導く為の落差)が無いとバケツ運搬を強いられますので、屋上の降水を一カ所に集める場所と、太陽電池で作動する小さなポンプ、その水を溜める高所のタンク(廃棄物となるケミドラム等の転用)とホース少々が必要設備の全てです。太陽電池からの電力は電圧を安定させたり蓄電に関わる設備も必要有りません。黙々と、晴・曇の日照に見合ったポンプの作動をしてくれれば光エネルギーを水の位置のエネルギーに変換してくれるのですから全く手間要らずです。

「右や左の社長様! お宅の社屋や工場の! 屋上緑化いかがです?」

表 題 [靴下を履いたヘチマ]

投稿日 [041006]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

フィールドレポーターの調査は、その調査期間が終わるころになって調査のスキルや勘所や面白さが解ってくる、身についてくるような気がするのは私ばかりでしょうか。

飽きずにヘチマの栽培を続けています。今年は少々出遅れて梅雨の終わり頃に種を蒔きました。ポリエチレンシートで底穴を塞ぎ、普通の作物では根腐れを起こす水抜きの穴なしのプランターに定植して全く問題なく順調に成長しました。ヘチマの物凄い底無しの給水力には驚かされます。地中の水と空気中の二酸化炭素と太陽光のエネルギーから澱粉・糖分・セルロース等の有機物を盛んに合成し続けている様子が実感できる様な気がします。

今年は9月前半までの台風で全部落果してしまいましたが、今はその後の結実分の猛烈な追い込みで急成長し40cm程の実が2個、呑気に風に揺られています。

花卉として扱われることの無いヘチマですが鑑賞価値のある美しい花に思われます。雄花は蕾がゴチャゴチャと頭を突き合わせて先端には未熟な蕾が有り、何度数えても正確には数えられなかったのですが、花が咲き終わってからは15本程の花茎が簡単に数えられ、あの苦労は何だったのだろうと思われます。少数の雌花開花時の授粉のチャンス逃さぬように、一日花の雄花が毎日咲き続けていく構図です。

* 葉が殆ど同サイズ同形で互生するのに幹にあたる蔓茎の太さが元も先端近くも殆ど異ならないのはどうしてでしょうか？

根から吸い上げられた水は下から順に葉に入り、葉毎に蒸散と空気中の二酸化炭素と太陽光による光合成を繰り返して有機物と酸素になり量が減って行く筈です。

ほぼ同じ太さの蔓茎からは、ほぼ同じ太さの維管束・導管&篩管と考えて良いのでは無いでしょうか？ 同じ太さの管を流れる水が途中で順に消費され続けるのですから、次々と流量が低下し、流速が落ちて行く筈です。

上部の茎の太さは「過剰な設備投資」であり、ヘチマにとって不利ではないでしょうか。

ヘチマの実の下端に小さな急須の蓋程の部分にミシン目を思わせる線が出来ました。これは、その部分が蓋の様にそっくり外れて種子がこぼれ落ちる前兆です。

昨年はこの時期を見逃し種子が全部落ち、地面を探しましたが一粒も見つかりませんでした。種子を取り出すには相当な手間が掛かるのに、知らないでいる内に果実の水分が無くなり乾燥状態、種子は一粒も残っていなかったのです。

そこで今年は破れた靴下を履かせてみました。サンタのおじさんがヘチマの種子を届けてくれるのでしょうか？

追記：ヘチマに履かせた古靴下とヘチマを緩く留め、揺れない程度に支柱に縛って3日たちましたが、その間の成長でヘチマの下端が吊り上げられる形となり曲がってしまいました。また、靴下を留めた部分も肥大したためヒョウタンの様なくびれが出来てしまいました。紐で括ったり型を押し付けたりすれば面白い物が出来そうです。

フィールドレポーター11月・12月の予定をお知らせ

11月06日(土)定例会:於:琵琶湖博物館交流室 10:00~17:00
11月20日(土)定例会:於:琵琶湖博物館交流室 13:30~17:00
12月04日(土)定例会:於:琵琶湖博物館交流室 13:30~17:00
12月18日(土)定例会:於:琵琶湖博物館交流室 13:30~17:00
<稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。>

フィールドレポータースタッフから一言

10月30日に開催しました秋の交流会のことを一言。

今津町での開催で湖西を中心に多数の方がご参加いただき、盛大でした。

午前中は自由参加でソバうちに体験、初めてでなかなか難しく均一に延ばすのに苦労しました。できたソバを昼食にいただきました。

午後からいまづ観察クラブの方々と交流会、挨拶もそこそこに、箱館山登山口で、蔵が立ち並び家並みをタバコ乾燥小屋まで歩きました。きれいに整備されたところでなかなか風情がありました。タバコの乾燥小屋ではタバコの栽培が盛んだった頃の様子を分かりやすく説明いただきました。湧き水のため池のなかに育った水草の黄緑色が今も目に浮かんできます。ゆめのの学習室にもどり意見交換をしましたが、もう少し時間が欲しいくらいでした。会長さん、副会長さん平井さんに大変お世話になりました。

今回の掲示板は交流会中心に、参加者の方の投稿を含めて編集しました。原稿ありがとうございました。そのほか前回号に載せられなかった原稿、時間が経っていて申し訳ございません。掲載させていただきました。紙面の都合で一部次号に回させていただく分もございますがご理解お願いいたします。これに懲りずにどしどしご投稿お願いいたします。

担当は草津市 桜島でした。



滋賀県立
琵琶湖博物館
交流センター
〒525-0001 草津市下物1091
TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
E-mail: freporter@ibm.go.jp

フィールドレポーター

掲 示 板

2004 年度第 5 号通巻第 34 号(2 月)



プランクトンギャラリー展の裏話

フィールドレポーター担当 楠岡 泰

12月23日から4月10日までギャラリー展「ミクロの世界を探検しよう プランクトンの不思議」を開催しています。プランクトンといいますが、多くの皆様は水の中にすむ小さな生き物というイメージをおもちだと思います。しかし、プランクトンの語源はギリシャ語のプランクトス(漂う者とか放浪者という意味)で、浮遊生物すなわち水の中に漂って生活をする生き物のことを指します。ですから、プランクトンは大きさに関係なく、1mを超えるエチゼンクラゲもれっきとしたプランクトンです。ギャラリー展の最初のコーナーでクラゲの映像を流しているのはそのためです。

このギャラリー展を作るにあたって苦労したところは、すべて手作りで展示物を作らなくてはならないことです。企画展でしたら、それなりの予算があり、パネルや展示品は外部に製作委託をすることができます。ギャラリー展の予算は企画展の数十分の一しかなく、ポスター、チラシや図録の印刷以外はすべて手作りでした(版下は当然館内でつくります)。

今回の展示で私自身がもっとも気に入っている展示は「プランクトンの世界に見る妖怪」というコーナーです。これはプランクトンの形と妖怪の形の類似性を展示したものです。人間の想像の産物である妖怪と長い進化の過程で生まれたプランクトンの形に不思議と共通性があります。当然昔の人が顕微鏡でプランクトンを観察してそれをもとに妖怪を作り上げたわけではありません。

この展示を思いついたきっかけは、これまでもプランクトンの観察会などで、ミジンコは頭の中央に一つの複眼をもっていて、まるで一目小僧のようだと言っていました。今度のギャラリー展で何か違う視点でプランクトンの形をわかりやすく子どもたちに紹介する方法はないか考えていたところ、ふと、もし、ミジンコが一目小僧ならば、ほかのプランクトンにも妖怪に似たものがあるのではないかと思いつきました。そこで、インターネットで妖怪についていろいろ検索したところ、「妖怪尽くし」というサイトにたどり着きました。このサ



イトは大久保義彦さんというイラストレーターが作っており、200種類以上の妖怪を紹介しています。さすがにこれほど多くの妖怪がいれば、プランクトンに似ているものもいろいろあります。さっそく、大久保さんにメールでプランクトンの写真を送り、今回の展示の趣旨や手作りの展示であることを説明し、妖怪絵の使用の許可をお願いしたところ示板、快く無料で妖怪絵の使用を許可してくださいました。しかも、インターネットで公開している妖怪絵は解像度が低いので、高解像度の画像および、妖怪の解説文まで作ってくださいました。もし、妖怪に関心をおもちの方がいらっしゃいましたら、以下のアドレスにアクセスしてみてください。

<http://www10.ocn.ne.jp/~hiko/youkai.htm>

今回のギャラリー展は担当した楠岡、大塚、谷口、大川のほかに大久保さんをはじめ県内の学校の先生方、研究者の方々など多くの方のご協力により完成することが出来ました。ここに深く御礼申し上げます。皆様も是非このギャラリー展を見にきてください(常設展の入館券があれば、ギャラリー展は無料です)。



次回フィールドレポーター調査

「エドヒガン」の調査(仮称)を予定しています。

エドヒガンについては掲示抜の2004年度第4号(11月発行)に昨年10月30日今津町で行いました研修報告の記事で紹介しておりますので再度読んでいただくようお願いいたします。

今回調査に検討していますきっかけは、いまづ観察クラブの皆さんがエドヒガンの保全活動をやっておられまして、研修会の中の交流会で、滋賀県下のエドヒガンの分布を調べてはどうかと提案があったからです。

フィールドレポーター定例会で協議した結果、春の調査に取り上げてみようということになり、いまづ観察クラブの皆さんに相談し下います。

相談の結果、調査することに話がまとまりましたら、エドヒガンは開花が東京地方の彼岸の頃に咲くといわれていますが、3月の中旬くらいから咲くという話もありますのでこれに間に合うように調査票を送付することになります。

その時はすぐにフィールドに出て身の回りのエドヒガンをさがしていただくこととなりますので準備方よろしくようお願いいたします。



前畑 政善さん

専門分野水産増殖

お話を伺ったのは12月29日、年の瀬の閉館後オフィスの背に魚網(多分投網)が2張り下がった彼の席で、キーボードで仕事をされている横から、かなりお仕事の邪魔をしてしまいました。

Q:少年時代は?

A:1951年(昭和26年)生まれ、ご自身は福井県東部の大野市、(九頭川上流、大野盆地の中心の城下町、人口4万人特産は水引細工)どんな少年だったかにつ

いてはごく普通で、優等生でも問題児でもなかったとの事(同感!少年は自分こそ標準、天動説であるべきだ!)当然かわの遊び、魚獲り。ご当地限定の特有の漁具・漁法等について伺ったのですが、特に無かった。素手に竹竿、石等を補助的に使ったの漁(と言うよりは、水や魚との友達付き合い?)とのこと。(これは河童やカワウソなみに川の流れや魚の行動について体で知り尽くさないと出来ない。)

Q:更に「ごく普通の少年」の姿に迫るべく、危ない目に遭った体験について伺う。(私の持論:樹からは落ちてみる、蜂には刺されてみる。一生め良い思い出になる。)今は規制されてか、見かけられなくなった、かつての男の子の遊びの定番の火薬、ロケットの話に水を向けると...

A:セルロイドや手製のロケットや写真のフィルムで遊んだ話。

又、古くから家にあった粒状火薬を家の中で燃やしての一寸した騒動の話。(同感、これこそが「ごく普通の少年」の有るべき姿。)

Q:その後の進路・学業・経歴は?

A:高知大学(卒論「四万十川のアユの生殖学的研究」)大学院農学研究科修士課程を中退してナマズ類3種に導かれて?勉強より面白い仕事の出来そうな?)琵琶湖文化館、更に琵琶湖博物館に転進、(更なる発展の為、旧軍隊の用語の「退却」の意味では無い。)つまり「河童&カワウソ的少年」は川遊びの延長に進路を定めて九頭竜川から四万十川へ(奇しくもカワウソの最終情報は1983年、四国南部の仁淀川)更に琵琶湖の有る滋賀県へ、降海、回遊、そして遡上して琵琶湖へ。博物館に来て学位取得(論文「日本産ナマズ類3種の繁殖生態学」)

Q:琵琶湖博物館でのお仕事は?

A:交流事業担当・生態系領域研究グループ・共同研究「内湖～水田間の水辺ネットワーク構築による在来魚復活に関する研究(マキノ地区の内湖・水田)」とのこと

Q:世間の休日が勤務の博物館ではご家族サービスもままならないと思いますが...お子さんとは魚取りなどを良くされましたか?

A:女のお子さんが2人おられるそうです。少しだけ魚釣り、ザリガニ取りなどをされたそうです。...女の子で餌が付けられれば上等!

*つまりテレビで活躍し中の(中本賢さん十さかな君)に加えて専門知識、学力があり・職種・職場環境・自然環境、水産業界の要求や世論も見方したような人。健康と家庭に無理の無い範囲で、どうぞこの道をお進み下さい。

*「種の保存」や「水産資源の増殖」に直結する多忙なお仕事の中、暮れの貴重な時間をさいて頂きありがとうございます御座いました。

日本全人口の約半数と共に声を大にして応援させていただきます。

「前畑頑張れ! 前畑頑張れ!」

§§§ インタビューの後先と、思い出のオーバーラップ

今回は暮れの忙しい時期に、前畑さんには2回 Fax でのやり取りと2回の面談のお手間を煩わせてしまいました。

お会いする約束は12月18日でしたが、その前夜、風邪気味の中を以前から依頼してあった、急な話のABCテレビの「探偵ナイトスクープ」の撮影に兵庫県西端の所在が不明になっていた私所有の山林をさまよひ、益々体調を崩しており、当日のインタビューはヨレヨレで使い物にならず、再度お願いしたのが12月29日、閉館後になりました。

ところが、私の興味に片寄った質問でアユやナマズに付いての事ばかりを大変面白く伺って帰ったのですが「学芸員紹介」にはならないので、又々Faxでのサポートをお願いしました(彼の表情、身のこなしが、お聞きした年齢より10歳は若く見え、再確認、その他)。

66歳直前の私より12歳は若いのですが、遊び(悪戯)の内容が非常に近いのです。

その頃、身近に調達出来た物にアルミニウムの鉛筆のキャップや、写真や映画のフィルムがあり、これは(ロケット本体十セルロイド:ニトロセルロース十樟脳 手製ロケットの推進剤)となり、セルロイドは建物の二階から火を付けて落とすとヒラヒラと燃え落ちて、丁度地上の人の顔の高さで燃え付き、不審に思い辺りを見回した頃には上にいる犯人は首を引っ込めており完全犯罪が成立するのです。

更に、夜店の照明にカルシウムカーバイドと水から発生させたアセチレンガスの炎が使われており、余ったカルシウムカーバイドが無造作に奮てられていました。(アセチレンガス十空気=爆鳴気、高性能爆弾)で悪さの為の宝物でした。

釣り道具も中学卒業までは、枝葉を払っただけの竹の延べ竿に、テグス代わりの縫い糸、浮きのゴムには塩化ビニル以前に電気コードの絶縁に使われていたゴムの被覆を転用しました。

今、思い出せないのが、長い延べ竿を担いでアーケードや自転車の乱雑に置かれた町中を通り抜け、町外れの川や池までどの様に行ったかです。

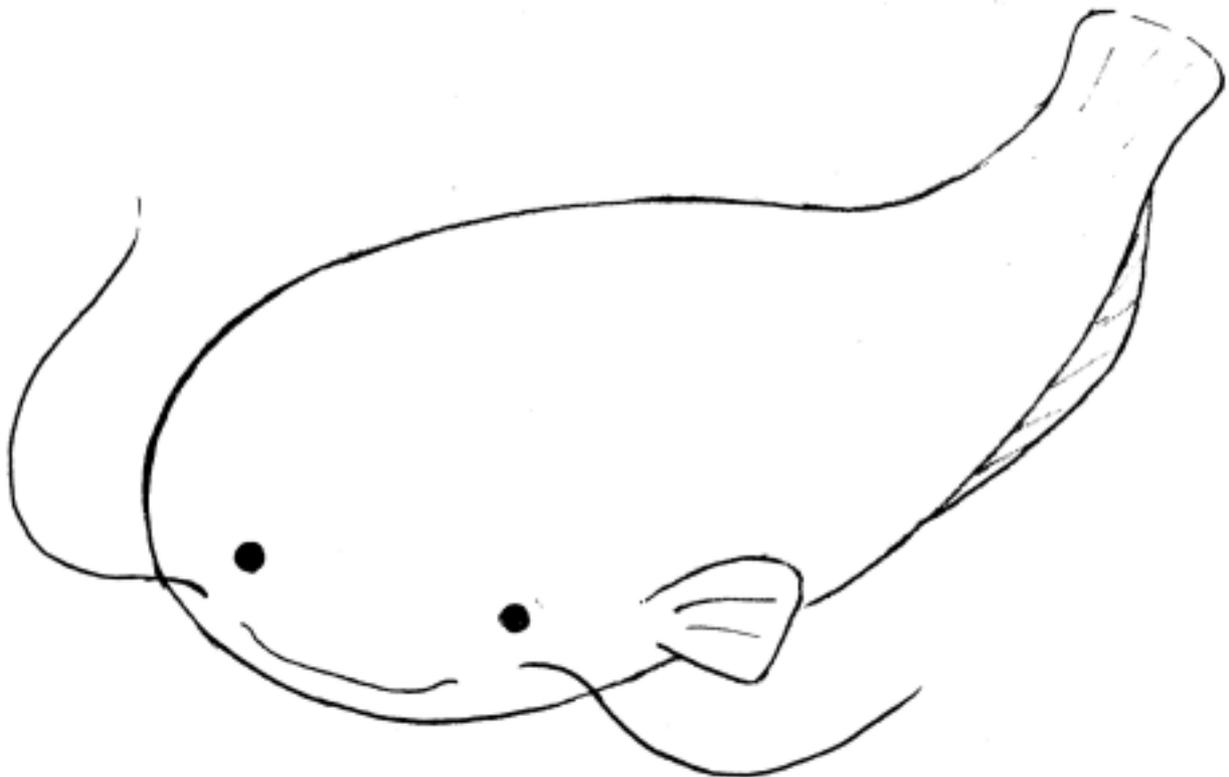
魚釣りから遠のいていましたが、大学卒業後(1962)に世間では今まで見たことも無い(グラスファイバー+ポリエステル)の竿とリールの組み合わせにすっかり置き換わっていました。

彼の家の中で燃えたと言う火薬は、多分推進薬(プロペラント)の粒状の黒色火薬ではないかと思います。村田式等の旧式ライフルを散弾銃(ショットガン)に改造した物の真鈴薬莢の手詰めを繰り返しての使用に適しています。

火薬類は目的別に、爆薬・炸薬・推進薬・火工品等に呼び分けられますが推進薬は銃砲やロケットの固形燃料で、密閉されてこそ真価を発揮しますが、解放状態で燃しても急激に燃える(速燃)だけで爆発や爆風は起こらないとおもいます。

**「田んぼ水辺研究会」へのアマチュアの入会も支障無いそうです。

入会金:終身会費(個人 3000 円、団体 5000 円、高校生以下は無料)申し込みは前畑さんまで。



夏のセミ調査集計結果報告

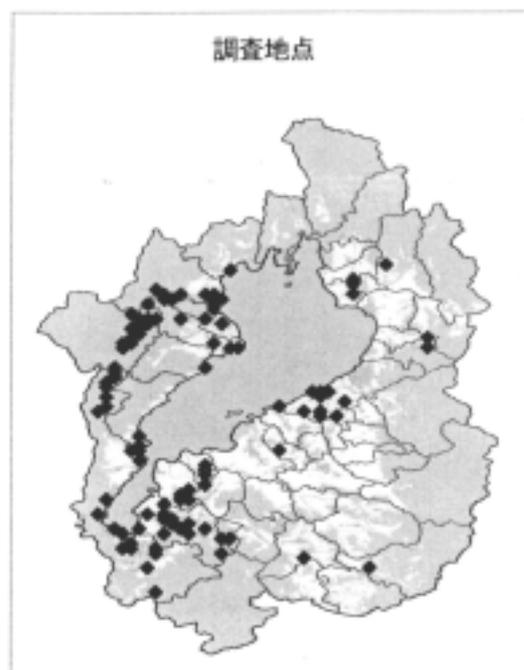
杉野 由佳

2004年7月1日から8月31日に行われた『夏のセミ調査』アンケートの集計結果を報告します。

昨年は6月や11月に台風が来たり、真夏日が去年の記録を更新したりと私たちが知っている夏の様子と少し違ったように感じました。これらが生き物や昆虫に少なからず何かしら影響しているのかもしれませんが、滋賀県全域でのセミの調査はあまり行われておらず、過去のデータがあまりないため、2004年以前との比較は難しいようですが、これを機会に定期的に調べることによって環境や気候の変化でセミの分布などがどのように変わってくるのか観察していくのはおもしろいのではないかと感じました。これらの結果をもとにもう少し詳しく、このセミの種類どうしや環境との関係を比較して見たいと考えています。

アンケート回答数:199件

(大津市 44件、草津市 22件、守山市 12件、栗東市 4件、野洲町 1件、中主町 5件、水口町 1件、土山町 2件、石部町 1件、安土町 1件、彦根市 18件、米原町 4件、浅井町 2件、びわ町 千件、湖北町 5件、志賀町 6件、高島町 1件、安曇川町 6件、新旭町 7件、今津町 19件、朽木村 26件、マキノ町 件、その他 4件)



今年初めて鳴き声を聞いたセミの種類と日時は:

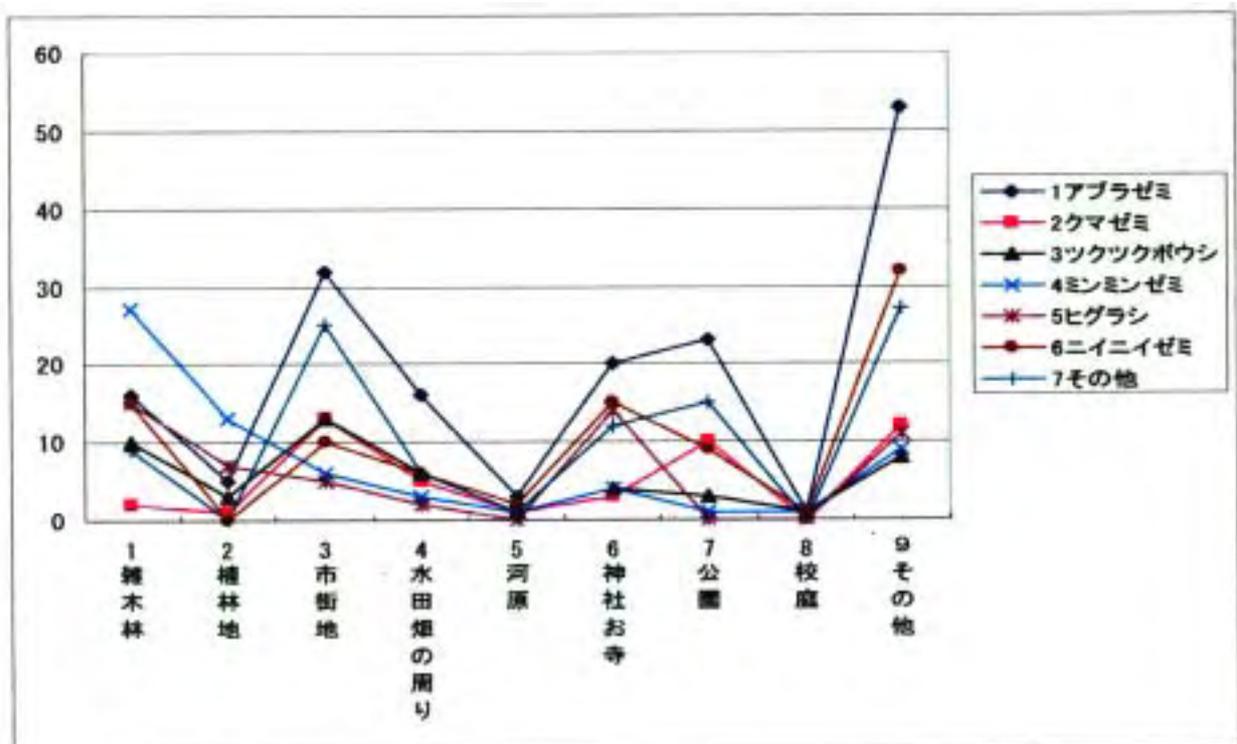
(初めて鳴き声を聞いたセミで、種類ごとに一番早い日にちのものをあげました)

ニイニイゼミ	6月9日	彦根市二稲部町
アブラゼミ	7月4日	彦根市稲部町
ヒグラシ	7月5日	朽木村市場
ミンミンゼミ	7月6日	びわ町新居、大津市打出浜
クマゼミ	7月13日	草津市東矢倉
ツクツクボウシ	7月22日	大津市花園町

調査場所の環境とセミの種類：

(各セミの種類には「生きたセミ」「鳴き声」「死骸」のデータが含まれています。)

	アブラゼミ	クマゼミ	ツクツクボウシ	ミンミンゼミ	ヒグラシ	ニイニイゼミ	その他
雑木林	16	2	10	27	15	15	9
植林地	5	1	3	13	7	0	0
市街地	32	13	13	6	5	10	25
水田畑の周り	16	5	6	3	2	6	6
河原	3	1	1	1	0	2	1
神社お寺	20	3	4	4	14	15	12
公園	23	10	3	1	0	9	15
校庭	1	0	1	1	0	1	0
その他	53	12	8	9	11	32	27



(グラフ1) 環境とセミの種類

たくさんの方にアンケートへのご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

野生生物の予知能力調査－ 1

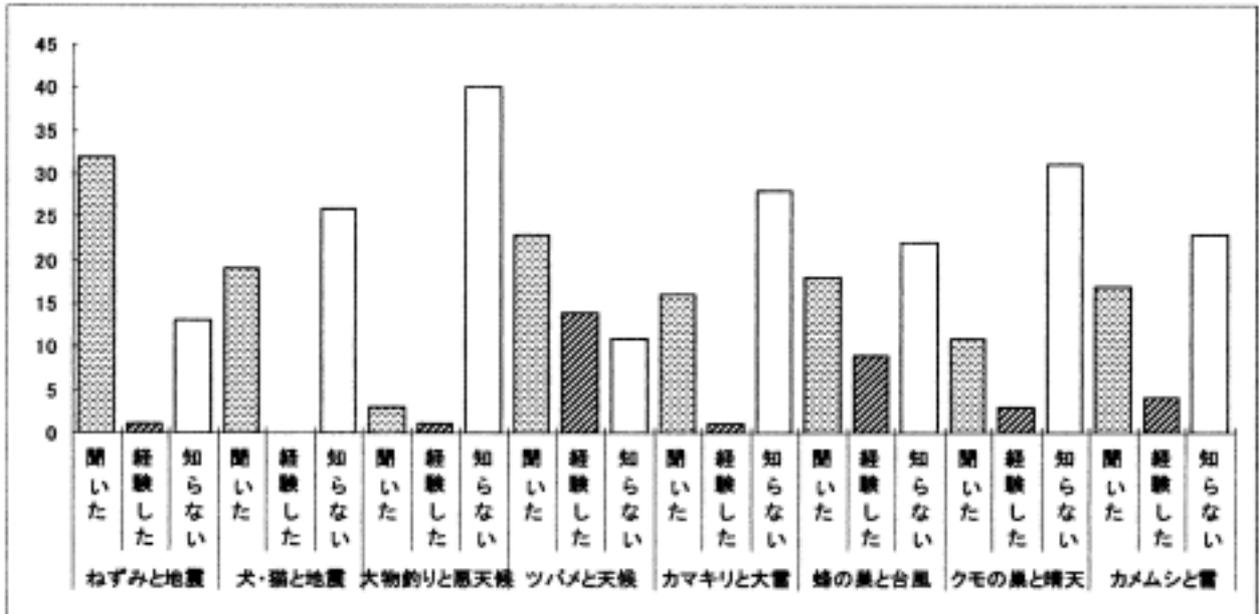
中間結果

昨年末のスマトラ沖地震・大津波と関連して、地震前に「カマキリが大発生した、津波襲来前にゾウが高地に逃げ出した、津波襲来後、公園内で野生動物の屍骸がほとんど見つからなかった」などのマスコミ報道がなされたことは、皆様ご存知のことと思います。

私たちフィールドレポーターの野生生物の予知能力調査では、1月末日現在で45名の皆さんから、回答を頂きました。

例示項目に対する回答数をグラフに表示しましたので、ご高覧下さい。

本調査は、2月末日までですので、さらに多くの皆様からの、ご回答をお願い申し上げます。身近なお知り合いの方にお尋ね頂いた結果でも結構です。



その他の言い伝えとして、皆様から回答頂いた事例の中から、比較的多かった事例を下記致します。

猫が耳の後ろをかくと雨が降る

羽虫(ウンカ、ユスリカ等)が低いところにかたまっていると雨が降る。

朝蜘蛛は縁起がよいが、夜蜘蛛は「おとといおいで」と言って、追い出す。

モズが「はやにえ」を高い小枝に刺すとその冬は雪が多くなる。

蛇が高い木に登ると雨が降る。

シロバナタンポポはいつ咲く？

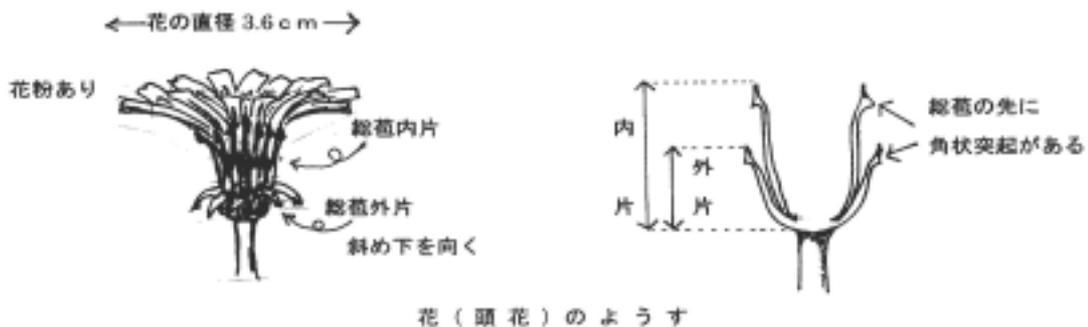
大津市 前田 雅子

日ざしが春めいて、そろそろタンポポの季節ですね。「在来種のタンポポは春しか咲かない」といわれますが、昨年11月29日にシロバナタンポポが咲いているのを見ました。場所は広島県東広島市で、市街地がきれるあたりの国道2号線の分離帯です。短く刈られた芝生の中にシロバナタンポポだけが背を伸ばし、20株ほど咲いていました(黄花のタンポポは見られませんでした)。

暖かい日が続いたので季節を間違えて出てきたのかと思いましたが、ほとんどの株に花が咲いていたこと、つぼみや綿毛の花茎が多数あったことから、自然なサイクルで咲いたように見受けました。

花の色は白一色、直径は3.6~4.0cm、花粉あり、総苞外片は内片の半分よりやや長いくらい、総苞の先に2~3mmの角状突起もありました。ところが総苞外片が斜め下を向く個体や、完全に反り返っている個体が多く、普通のタイプ(上向き、あるいは斜め上を向く)は3分の1くらいです。

花の直径や、総苞の長さ・形からシロバナタンポポと判断しましたが、花の時期と総苞外片の形はおかしな集団でした。



花(頭花)のようす

守山市でも、秋にシロバナタンポポが咲いていたそうです。また、2001年フィールドレポータータンポポ調査では、県北部のシロバナタンポポは黄色のタンポポに先立って3月頃に咲き始め、4月初めには見られなくなるのに対し、守山・草津・旧甲賀郡では5月頃まで咲いていて、黄色が混じるシロバナタンポポに注目が集まっていました。

近年、在来種と外来種の間を生じた雑種が広がっていると聞きます。見かけは在来種そっくり、あるいは外来種そっくりなものがあるとか…。ひょっとしてシロバナタンポポにも何か変化がおきているのでしょうか、それとも三重県などで確認されたキビシロタンポポが滋賀県にも?と、疑問は膨らむばかりです。けれども咲く時期に限られ、地域性があり、目に見えない変化が進んでいるなど、一人では解決できないことが多すぎます。そこで、各地の皆さんの観察を是非ともお聞きしたいのです。今年シロバナタンポポを見られた方、

花を見た日(分かれば、その集団の咲き始めと終りの日も)

花は白一色、それとも黄色の部分がまじる?

花の直径は何センチ?花粉はある?(セロテープを軽く当てるとわかりやすい)

総苞外片の向きは?総苞片の先に、三角形の角(っの)のような突起がある?

などを教えてください。お願いします。

三つの 葉物語

投稿日「041119」

「大津市日吉台 有田 重彦」

我が家の庭には三つの 葉が育っていますが、第一は一つ葉(ヒトツバ)で三上山から頂戴してきた移植もの、第二は明日葉(アシタバでアヤハ(D.I.Y.の店)で偶然見つけた苗を求めたもの、第三は三つ葉(ミツバ)で庭のあちこちに沢山自生しているものです。三つの由来が皆違うことと、明日を今日明日で2と数えると、名前が123となるのは偶然の不思議でしょうが、これらにまつわるお話は次のとおりです。

(1)一つ葉

今年6月の掲示板に「平地の一つ葉」として、近くの小学校の庭の木の幹を取り巻く大群落を見つけたことを掲載してもらいましたが、我が家に移植したものは、その後成長が活発で葉の藪も26枚、5月から7枚増えるとともに、根茎が鉢の外にどんどん伸び出し、三上山の岩の上に生い茂る生態をミニ再現しているようです。葉の数が1年10枚から20枚増えるとして目標を百枚とすれば5年から10年かかります。私の生存確率はまだ高いようなので、そのうちに大きな鉢に植え替え様ようか、どんな鉢にしようかと思案しています。

(2)明日葉(写真参照)

歳にとって忘却のスピードが速く、なんのきっかけで明日葉を知ったか思い出しません(ここ数年のこと)、今年春、アヤハの園芸品売り場でこの苗を見つけ、なんで珍しいものを売っているのかなと思いながら二本購入しました。一寸狭いところに植えたので、成長すると高さ1メートルくらいになる多年草ですが、半年後の現在で30センチ弱です。食用で若葉を今日摘んでも明日にはまた若葉が萌えでるのが名前の由来ですが、まだ成長中ということで新芽を避けて古い葉を摘んだ実験では、実証テストにならずでした。

茹でて味見した結果は、セリ科のためその系統の匂いがあり、私にとってはいまいちでした。最近、この葉の成分に、インスリンと同じように血糖値を下げる効果があることがわかったとのニュースを読み、アヤハは先見の明があったのかなと思いました。私は糖尿病とは無縁のようなのでこの買い物は失敗だったのでしょうか。

先日同窓会で千葉に住む友人がこちらには良く見るよと言ってましたが、南関東から紀伊半島の太平洋沿いの草原などに自生しているそうです。八丈島には特に多く、現地ではハチジョウソウと呼ぶようですが、大島では店のメニューに天麩羅があるそうです。

(3)三つ葉

ここ数年、自生の三つ葉が雑草のように増えてよく引き抜いているのですが、この春、アゲハチョウの薄緑色の大きい幼虫と黒い小さな幼虫が大きくなった三つ葉の葉を食い荒らしているのを見つけました。

毎年、我が家の山椒にはアゲハチョウが卵を産み付けるので、山椒は成長できず、アゲハの餌としてという名目で50センチほどのままにしていたのですが、去年たまたま私の虫の居所が悪かったせいか、とうとう引き抜いてしまったところでした。山椒が駄目なら三つ葉で我慢するのかとびっくりして、大塚さんと楠岡さんにこの話をすると、即座にそれはキアゲハだといわれました。私は、ナミアゲハとキアゲハの区別も知らず、ましてキアゲハの幼虫の食性がセリ科植物でニンジン、パセリ、セロリ、それにミツバとは驚きの一語でした。山椒を食べるナミアゲハと餌の取り合いをしないよう食べ分けている利口なアゲハ族です。前の話の明日葉がセリ科植物ということは、来年キアゲハがこれに卵を産み付けるかどうかという観察の楽しみが増えました。

以上、我が家の庭に育っている三つの葉物語ですが、明日葉の苗を見つける前の段階で二つの葉物語として投稿しようとは考えもしませんでした。もっとも、有名な二都物語 (A Tale of Two Cities, Charles Dickens) の例はありますがその時は思いつかずでした。三つの恋の物語、三つのオレンジの...、という音楽が映画の題名の記憶がかすかにあり、三つという言葉に何か特別のものがあるようで、明日葉の苗を見つけた時点でこのタイトルでまとめようということになりました。多からず少なからずの中庸が三つということでしょうか。

ところで、ベートーベンに続く交響曲の流れに新風を吹き込んだ大作曲家、プロコヒエフの作品の中に三つの日本の歌曲というものがあり、歌詞の出所が万葉集から一つ、古今和歌集から二つだと最近知りました。古典文学に造詣の深い日本人が関与したのでしょうが、驚き(木)桃の木山椒の木!!! これも三つの木でした。

追記) 読売新聞記事(日付は9月頃)

タカラバイオ(大津市)は明日葉に含まれるフラボノイドの一種のカルコンに血糖値を下げる効果があることが判ったと発表。マウス実験では発症後も糖尿病特有の症状が緩和されたという。



どこにでもある風景の簡単な報告

その7

04 06 21

今津町 角井 俊明

メッシュマップ 5335-1777

天然記念物ニホンカモシカの死体を良く見かける、常に足元近くにきてからわかるので、ドキッとさせられる。熊本日報には疥癬などの皮膚病の拡大が原因と報じていたが...足尾の荒地に植林をしていく仕事を放送していたが、ニセアカシア、ヤシャブシ、グミともうひとつ何かを、クマも復活していた。このような動きが普通で、現在高島郡で起こっていることは異常なことで何とか阻止しなければならない。



メッシュマップ 5335-1767

発生土砂の行方はどうなったか、重機が川に浸入した後もそのままだし、こんな工事がこれからも許されると考えているのか。人間の欲のために何故こんなさまを見なくてはいけないのか。一連の所業はもはや犯罪と考えてよいだろう、よって告発すべし!



表 題 [クリスマスリースの植物について]

投稿日 [041204]

名 前 [加 固 啓 英]

保護者も参加する学童の課外授業のクラフトの手伝い(「指導」という言葉がきらい)を続けています。どうも、私の作る物はあまり美しくも精緻でもなく、子供達の作品と「どっこいどっこい」か「毛増し」程度の出来栄えのところが子供達に受けているようです。季節柄、出来るだけ自然の素材でクリスマスリース作りを通して子供達の関心を、理科・自然科学方向に向けさせたく思っています。

以下の定番の素材で分からない点がありますのでお教えてください。

《ヤドリギ》

* ヨーロッパの習慣では、玄関に吊り下げたリースのヤドリギの下を通った好きな女の子にキスをしてもらいたいとされていたと聞きます。

ヤドリギ(種)は樹木の材にがっちり根を張って10cm程の茎(幹・枝)が伸びる先で6~8又に分れることを繰り返した結果、全体が80cm程にもなる、造り酒屋の軒先の「杉玉」の様な殆ど完全な見事な球形になる様ですが、茎の分かれ目毎に離層があるらしく、持ち帰ると節毎にバラバラになってしまいます。これを吊り下げるには樹脂で固める等の処理が必要に思われますが伝承された方法があったのでしょうか。

* ホヤとはヤドリギ(種 *Viscum album* var. *coloratum*)の俗称とおもっておりましたが広辞苑(第5版)では「他の樹木に寄生した木。ほや。ほよ。」となっております。

どちらが正しいのでしょうか。

* 愛知川右岸の河畔林にヤドリギが大繁殖しており、取り付かれた樹木は6~7年で枯死しているように見受けられます。近年はソメイヨシノの並木にも見られるようになりました。ヒレンジャクやキレンジャクが種子の運び手として知られていますが、この辺りではヒレンジャクの群れを一回見かけただけです。しかし、お尻から(多分)種子の付いた粘液の糸を引いて樹冠を飛び回っているヒヨドリを良く見かけます。

《ヒイラギ》

* ヨーロッパでリースに使用される、日本では「ヒイラギ」とされている植物は何なのでしょう。

** 蛇足 庭のヒイラギ(斑入り)にキンモクセイほどの小さな純白の花が咲きました。雄株なので不釣り合いに大きな葯が二個ずつ付いています。

表 題 [樹齢1年、巨木の素]

投稿日 [041015]

名 前 [彦根市 加 固 啓 英]

アカマツやクロマツの林床で利用されることなく朽ちて行くマツカサ(マツボックリ)は火付きも良く屋外のバーベキュー等の着火燃料としてとても重宝です。

突如妙なことを言い出します。このマツカサは地面を匍匐前進するのではないかと思われるのです。マツカサの鱗片の間にはたいてい松葉が挟まっています。これは湿度の変化で傘が開いたり閉じたりする間にくわえ込まれたのでしょう。鱗状の物が開いたり閉じたりするのですからマツカサ全体が一方向に進まない訳がないと思うわけです。

どなたか暇のあるかたの観察をお願いします...と言っても私より暇な人なんているかな~???

マツカサを紙袋に入れておくと底に種子が溜まります。カエデ類のプロペラ状の一对の種子を2個に分けたような種子です。

琵琶湖岸由来のクロマツの種子を昨年10月15日に直径17cmほどの鉢に蒔き、13株が発芽・成長しています。(多分発芽率100%、自然界ではバイオニア的で、日差しの当たらない林床では殆どが1~2年以内に枯れる。)9月に一株だけを他の鉢に移しましたが、現時点では密植されているものと成長速度に変わりは認められていません。

樹齢が、は種から数えるのか発芽からなのかは知りませんが、現在65歳の私が還暦になっても樹齢15年程度にしかありません。

これは高価な「五葉松」や「ハイマツ」でも出来そうに思います。興味ありましたら試してください。...子々孫々までの遺言を残して。

Oct/15/2004

比叡山における「えいざん」すみれの分布調査

投稿日 平成17年2月5日

大津市 多胡 好武

比叡山は昔からよく歩いたが、いまだ「えいざんすみれ」にお目にかかった事がなく今年は何とか「えいざんすみれ」の咲く時期に集中的に比叡山にのぼり、その分布を調べる計画です。

そこで皆さんに「えいざんすみれ」の咲く場所をご存知の方は教えていただければ短い花の時期に効率的に山を歩けると思っています。

ご存知の方もいるかと思いますが、山野草ブームの影響もあり花を見つけると根こそぎ持ち帰るといった悪しき風潮もなきにしもあらずで、かなしいことですが「えいざんすみれ」も非常に少なくなっているとききます。

自然にはえる環境等しらべ、できれば増やす方向で活動していきたく思っています。

「えいざんすみれ」の特徴

山の陰地にはえる。根茎は短く、地上茎はない。葉はまず三裂、つぎに側方に出た2裂片がさらに2裂、それぞれの裂片がまた裂けるので、込み合った形になる。

花がすむと、長さ10cmほどの裂片がほとんど裂けない小葉が出て、まるで別物のように見える。

花は2cmほど、淡紅色まれに白色で紫色のすじがあり、側弁の内側には立った毛がある。

花期は4~5月。

花が咲く場所をご存知の方はお知らせください。

freporter@lbn.go.jp まで

フィールドレポーター 2月・3月・4月の予定

- 2月 19日(土) 定例会:於:琵琶湖博物館交流室 13:30～17:00
2月 26日(土) 10:00～15:00 第5回草津パワフル交流 21
草津市立まちづくりセンター(駅西口側)
フィールド・レポーターの調査報告も展示しています。
- 3月 05日(土) 定例会:於:琵琶湖博物館交流室 13:30～17:00
3月 19日(土) 定例会:於:琵琶湖博物館交流室 13:30～17:00
4月 02日(土) 定例会:於:琵琶湖博物館交流室 13:30～17:00
4月中旬 交流会予定(2004年度の調査報告)於:琵琶湖博物館
<予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。>

フィールドレポータースタッフから一言

大寒に入ると暦どおりの寒波に見舞われ、比良山は一面の雪景色になり、聳え立って見えます。晴れた日にはカメラマンが繰り出して、比良の雄姿を狙って写真をとっている姿が多く見られました。立春は過ぎましたがまだまだ寒く春は遠い感じですが、里山にでかけるとマンサクが咲き、フキノトウも見かけます。頼もしさも感じることができました。

今回、前号までの編集の都合で投稿いただいてから掲示板掲載まで時間が経ってしまった原稿もあり、申し訳なく思っております。いただきました原稿はできるだけ早く掲載するように心掛けています。これに懲りずにご投稿お願いいたします。

担当は草津市 桜島でした。



滋賀県立
琵琶湖博物館
交流センター
〒525-0001 草津市下物1091
TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
E-mail: freporter@ibm.go.jp